秋津公民館主催講座

# 「これまでの横井小楠　これからの横井小楠」

～「外国人」の記述から横井小楠の実像に迫る ～

日時：令和2年10月25日～12月13日（全6回）

講師 ： 川口 博史 さん

※ 講座で使用した資料を講師の許可を得て掲載しています。

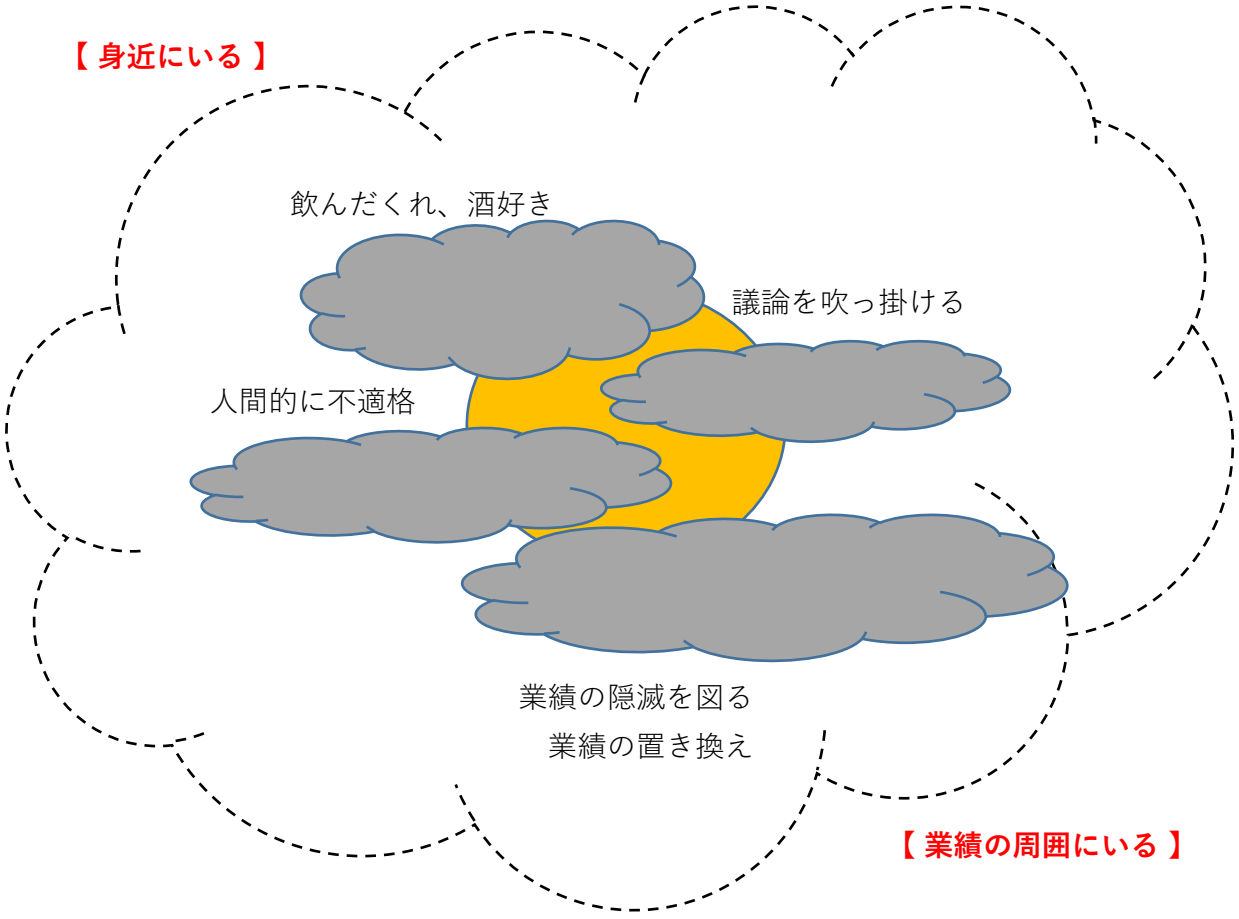
# 世界に誇る「横井小楠」の事実を知らされていない

**明治の外国人から「不世出の政治家・思想家」と評価される小楠**

**我々が知っている情報とは、「天と地の差」がある。**

**なぜ？**　そこに、小楠が歴史の闇に葬られ続ける「なぞ」が見えてくる。

**「人間性否定で嫌悪感をあおる」**、横井小楠に恨みを抱く者たちの雲（1）




**「業績の消去を図る」**、横井小楠に「恨み」を抱く者たちの雲（2）

〇小楠の発言、論の復活に嫌悪と危機感（恨み）を持つ者の存在がある。（隠蔽、隠匿、隠滅、捏造など、業績を塗り込める作業の痕跡がある）

# 前段　本来の仲の良い「師小楠と孫弟子龍馬の姿」へもどす

1　**信念の坂本龍馬　オリジナリティが無い分、身近に接することで憧れの人物像に近づこうとした。小楠も勝も、真摯で純粋な、また理解が速く行動力のある龍馬をかわいがった。**

（有名）龍馬：　世の人はわれをなにとも言わばいえ　我がなすことは我のみぞ知る
**オリジナル松陰：　世の人はよしあしごとを言わばいえ　賤が誠は神ぞ知るらん**
（有名）龍馬：　日本を今一度洗濯いたし申し候　（＝“自分が”--洗濯する）
**オリジナル小楠：　天下一統人心洗濯希うところなり**

2　**明治の頃を書いた書物に、坂本龍馬の名前は一度も出てこない。(1)～(4)は確認済。**

(1)　山路愛山（1865～1917）　明治39年「日本教会史」（江戸～明治）
(2)　W.E.Griffis （1843～1928）　滞在：明治3～明治7　「The　Mikado」（大正4）
(3)　A.B.ミットフォード　滞在：慶応2～明治3　「イギリス外交官の見た幕末維新」
(4)　エルヴィン・ベルツ　滞在：明治8～明治38「ベルツの日記」（皇室付きの医師）
【他に確認できそうな資料】
(5)　防長回天史　　幕末維新の長州の活躍をまとめたもの
(6)　望月小太郎著　　The Late Emperor of Japan as a World Monarch.


ベルツ

3　**薩長同盟に坂本龍馬は関係していない。「同盟」という言葉自体無い。**

(1)　W.E.Griffis （1843～1928）　大正４年　「The　Mikado」
　　大久保の示唆で、西郷が動き、長州に「協調」を提案とある。
(2)　最近のTV歴史番組（NHKBS「英雄たちの選択」）
　　薩長同盟（協調）の場にいたのは、小松帯刀、西郷、桂。龍馬がいない初めての番組。
(3)　“桂に促されて龍馬が同盟書に朱書裏書した話”は、完全なフィクション。

4　**坂本龍馬の名が初めて出てきたのは、明治１３年。１６年に新聞で世に知られる。**

(1)　仕掛け人は、土佐の自由民権運動家、坂崎紫瀾（1853.12.18～1913.2.17）。
M13 征韓論で下野した板垣退助が創立した「立志社」の機関誌「土陽(高知)新聞」の編集長。
　　自由民権運動の一環として、フィクションの歴史政治小説「南の海血汐の曙」の連載開始。
M16 自由民権運動弾圧に対抗する政治小説「汗血千里駒」を連載。主人公は坂本龍馬。
(2)　「神英雄の坂本竜馬」は、明治皇后の夢枕から。（出所：宮内庁伝記）
明治皇后の枕元に二晩続いて現れ「日本海軍の生みの親、坂本龍馬」と名のり、「今度の戦（日ロ海戦）は、私が勝たせる。」と告げた。職員が写真を持ってきて「この男ですか」と尋ねると、皇后は「この男だ」と答えた。　※新聞で紹介、第二次龍馬ブームになったという。
※日露戦争を詳しく記録した「ベルツの日記」には、その紹介は無い。


もう一人の龍馬

5　**龍馬の絶対的印象を刷り込んだ、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」**　　※「竜」の字が意味するもの
S37 司馬独自の発想と歴史観に基づく小説（フィクション）。ＴＶ時代、月光仮面など超人的な英雄が人気を博す時流に乗り、龍馬も一気に神がかり的英雄へ仲間入り。俳優の力も。
※ 坂本龍馬の写真は２種あるが、別人。靴履が有名だが、表に「龍馬」と記名があり不自然。

6　**常識ではありえない、理解不能な龍馬の実績**

(1)　【一般的な常識】元治2年3月海軍操練所閉鎖。5月長崎に亀山社中を開く。8月グラバー商会から7,800丁仕入れ、倒幕の準備にとりかかる（一般的な歴史）。
【冷静に、常識で考える】脱藩浪人＋仕事を無くした人間＋資金がない人間が　➡ 東洋最大の武器商社「ジャーディン・マセソン商会」（グラバー商会はその支社）から膨大な数の銃を仕入れた。常識では考えられない不可能なこと。「神がかりの英雄竜馬」は誰が創った。

事実　○薩摩はイギリスとのつながり
○武器や軍艦が欲しい薩摩
○藩の直接購入----幕府の許可が必要
△グラバー商会との間にダミー会社
○海軍操練所が閉鎖。人材放出。
○薩摩の家老小松帯刀は、豪商小曾根屋に命じて亀山社中を設立。社長：龍馬
○南北戦争で多量の銃余り
○３か月後には銃7,800丁を輸入
○社長が土佐の脱藩浪人という益

(2)　坂本龍馬の超人的な活躍の「裏付」＝龍馬の「膨大な量の文書」
横井小楠、坂本龍馬展。文書の８０％は龍馬の文書。当時、名もない人間が世の中を動かす。あり得ない。偽作の可能性。時代を特定する14Cや筆跡鑑定が必要。　※「船中八策」や「五箇条の御誓文」等、龍馬の業績というのは極めて怪しい。


グラバー

7　**フィクションはフィクションで収まらせ、歴史に混在させない。**
横井小楠が「隘陋」と呼んだ者たちの存在。
**「尊皇攘夷者は無識・無策の者」「国学者の見識は狂っている」**
その恨みで、「闇に封じる行い」は、今も続いている。

**1865年薩摩から長崎の途中、龍馬は四時軒に寄った。**



小楠　と　竜馬

① **その場に居合わせた**徳富一敬の記録
「和気あいあいとした酒宴であった。」
② **父徳富一敬から話を聞いた**徳富蘆花の記録
「西郷や大久保の芝居が詰まったら、先生は２階からちょいちょいと指図してください。」と、龍馬が言うと、小楠は笑いながらうなづいた。
③ **戦後生まれの歴史学者（国学）**が、歴史館の紀要に寄稿した概要。
小楠は納得せず龍馬に抗論した。夜を徹した喧々諤々たる論争の後、「先生は田舎に引きこもって、話の分からぬくだらない田舎爺に成り下がった。先生は世の中で大家と言われているが、今日の話は、つまらぬ小役人でも言わない話だ。」と。竜馬は、説得することを諦めた。小楠は怒って、「汝、再び我を訪るなかれ」と言い放った。大げんかの別れとなった。※英雄龍馬に抗論し罵倒される田舎のもうろく爺の印象を、意図的に植え付けている。


徳富一敬

☆**<u>この一件は、どうしても看過できない理由がある</u>**。
「創作上の喧嘩別れ」を「事実である徳富一敬の記録」と同価値の資料として扱う歴史家の存在。
特に、③の内容には悪意がある。「隘陋」と呼ばれた側の恨みのうっ憤晴らしか。普通の歴史学者なら、一つの意見として見過ごしもできるが、京都の歴史館の管理職経験者、文部科学大臣表彰を受けるほどの権威者が書いているので、よけいにたちが悪い。一般の歴史学者は、本や論文を書く時に暗黙裡の忖度を要求される。平成の大偽史「東日流外三郡誌」で権威者に忖度したばかりに、真偽を検証せず騙された学者達の姿があったことは肝に銘ずべきである。

8　**<u>W.E.グリフィスによる「横井小楠」の評価</u>**　（皇国史観、英雄史観、検閲に影響されない人物）
(1)この貴公子（福井藩松平春嶽）のために、いや日本のため、世界のために幸せだったことは、彼が自分でもしばしば認めた如く、横井平四郎の弟子になったことである。
(2)「横井小楠が、その主君（松平春嶽）に及ぼした影響力において、ちょうどジョージ・ワシントンの下にいた**<u>アレグザンダ―・ハミルトンに匹敵</u>**する。
(3)「１８６９年、京都新政府の会議において、横井は信教の自由だけでなく、エタつまり社会的賤民の地位を公民にまで引き上げることを主張し、実現を確実にした。その精神において、**<u>リンカーンの偉業にも比すべき仕</u>**事である。
(4)**<u>明治の精神的栄光の</u>**第一に、最も偉大なものとしてあげられるのは、百万に及ぶ**<u>賤民の地位を向上させて、公民権を与えたこと</u>**である。」「横井平四郎は、たぶんこの国で初めてこれらの人々の地位を引き上げ、市民権を認めるべきを弁じた政治家であった。」


グリフィス

# 第一部　横井小楠概要

## 第一部その１「人生」

| | 満年齢 | | |
|---|---|---|---|
| 1809/9/22 | 誕生 | 0 | |
| | | : | |
| | | : | |
| | | 5 | |
| 時習館（文武両道） | | 6 | |
| 精神：仁礼信義智 | | 7 | |
| | | 8 | |
| | | | |
| | | 17 | |
| | | 18 | |
| | | 19 | |
| | | 20 | |
| | | 21 | |
| | | 22 | |
| | | 23 | |
| 時習館居寮生(特待生) | | 24 | |
| | | 25 | |
| 講堂世話役(助手) | | 26 | |
| 居寮長(学生のトップ) | | 27 | |
| 第一次時習館改革失敗 | | 28 | |
| 居寮長罷免・江戸遊学へ | | 29 | |
| 酒に酔い喧嘩／帰藩 | | 30 | 出会い：藤田東湖､川路聖謨 |



| | | | |
|---|---|---|---|
| 自己の学問を反省 | 31 | | |
| 研究会(５人)→実学へ | 32 | | |
| 私塾を開く・実学党結成 | 33 | 藩政改革(時務策)失敗 | |
| 徳富、矢島、、竹崎入門 | 34 | | |
| 第二次時習館改革失敗 | 35 | | |
| | 36 | | |
| 「小楠堂」新築 | 37 | 長岡是容家老職辞退 | |
| | 38 | | |
| | 39 | | |
| 三寺三作(福井) 入門 | 40 | 小楠は真の学者(福井へ) | |
| 諸国遊歴(北遊) | 41 | 福井で講義(藩士感動) | |
| 学校問答書(福井藩へ) | 42 | | |
| 文武一途の説(福井藩へ) | 43 | | 黒船 |
| 夷虜応接大意(川路へ) | 44 | 兄死去(順養子で家督) | |
| 海国図志を読了→開国派 | 45 | | |
| 沼山津「四時軒」(彌富) | 46 | 河上玄斉から絶縁状 | |
| | 47 | 福井藩主春嶽から和歌 | |
| 賓師として福井へ | 48 | | 安政の大獄 |
| (財政立て直し改革指導) | 49 | 利益初年120万両(福井藩) | |
| 国是三論(改革成功理由) | 50 | 利益次年240万両(　〃　) | |
| 総裁政治顧問・国是７条 | 51 | 春嶽幕府政治総裁へ | |
| 破約必戦、攘夷三策 | 52 | 勝海舟、龍馬と会う | |
| 士道忘却事件(名付に悪意) | 53 | | |
| 勝から贈与金(龍馬持参) | 54 | ｸﾞﾗﾊﾞｰ武器販売へ | |
| 龍馬に「二度と来るな」 | 55 | ｸﾞﾗﾊﾞｰから銃7800丁(龍) | |
| 甥2人を密航でアメリカへ | 56 | 龍馬「小楠は天下の人物」 | |
| 国是12条 | 57 | 龍馬「小楠を参議候補に」 | |
| 天道覚明論(天と人一体) | | 龍馬、船中八策を示す | |
| 明治政府参与へ | 58 | 大政奉還、五箇条の誓文 | |
| 政府の進路ゆがみ修正へ | 59 | M2/2/15小楠暗殺 | |

M3(小楠は耶蘇教、国賊の中傷＝判決が長引く）

## 小楠の遺志を継ぐ

| | 明 | |
|---|---|---|
| 肥後維新(藩知事：護久) | 3 | 大惨事(弟)権〃(是容の子) |
| 熊本洋学校・医学校 | 4 | 廃藩置県（中央から県令） |
| 徳富、竹崎、山田ら小楠 | 5 | 学制発布(既存の学校廃止) |
| 門下が藩の主要な地位 | 6 | 地租改正(地価の３％金納) |
| 税を安くする。殖産（蚕） | 7 | （中央集権化：天皇中心） |
| 医学校廃止 | 8 | 岩倉・大久保独裁 |
| 1/30花岡山　11月新風連 | 9 | ｼﾞｪｰﾝｽﾞ退任・洋学校廃止 |
| →同志社総長(2,3,6,7,8代) | 10 | 西郷、木戸D |
| | 11 | 大久保D |



岩倉D

| | | |
|---|---|---|
| 洋学校生徒 | 17 | |
| | 18 | 伊藤(長)：初代総理大臣 |
| | 19 | |
| | 20 | |
| | 21 | |
| | 22 | |
| 国会開設 | 23 | 教育勅語(山県：長) |
| | 33 | 軍部大臣現役武官制度 |
| | 昭 | |
| 国体明徴声明（２回） | 10 | 「神国日本」「天皇は神」 |
| | 15 | 皇国,皇軍,天皇陛下万歳 |
| 敗戦 | 20 | 吉田茂国会演説(回避) |

# 小楠の業績　第一部のその２「業績」

| 小楠の提言 | 結果（継続） |
|---|---|
| 第一次時習館改革 | × 失敗 |
| 第二次時習館改革 | × 失敗 |
| 福井藩改革（経済・藩校）≪士道・富国・強兵≫ | ◎ 莫大な利益、一躍雄藩へ<br>春嶽を幕府政治総裁へ |
| 幕府政治改革のブレイン（1862.8 国是七条） | |
| 将軍の上洛 | △ 「国を一つに」を朝廷理解せず |
| 参勤交代の廃止 | ○ 浮いた金を海防費へ |
| 賢を撰し政官へ | ○ 維新の指導者～現在も続く |
| 言路が開かれた公共の政 | △ 「民のため」の質向上を |
| 強い海軍の創設 | ○ 日本海軍 |
| 官貿易 | ○ 官営工場、官営施設(開拓) |
| 貨幣を公に | ○ 国立銀行　金本位制 |
| 書　翰（1863） | |
| 朝廷の組織改革 | ○ 総裁・議定・参与（維新） |
| 政は朝廷から | ○ 王政復古 |
| 共和一致の政 | △ 帝国議会～現在は「議論」不足 |
| 国是１２条（1867.1） | |
| 天朝を尊び、幕府を敬う | ○ 公武合体（革命軟着陸） |
| 賢才を挙げ不肖を退ける | ○ 能力で登用（脱家系・血筋） |
| 言路を開き上下の情を通ず | ○ 広く意見を聞ける議会 |
| 強兵 | △ 条約改正～太平洋戦争の因 |
| 外国と交わる | ○ お互いを尊重し対等の立場で |
| **天下の治乱に関わらず<br>国の独立を以て本と為す** | ◎ **第一義は国がまとまること<br>大政奉還、江戸城無血開城** |
| 風俗を正す | × （薩長政治）風紀紊乱の世へ |
| 学校を興す | ◎ 学制（優秀な人材育成の道筋） |
| 士民をいつくしむ | × 臣民(天皇の所有物)⇒人命軽視 |
| 信賞必罰 | ○ 刑法局の設置 |

| 小楠の提言 | 結　果 |
|---|---|
| 富国 | △ 財閥出現(政財癒着)～経済大国 |
| 列藩に親しむ | ○ 議定に旧藩主(廃藩置県で解消) |
| 新政に付して春嶽に建言（1867.11） | |
| 大政奉還、四藩の補佐 | ○ 議定、参与へ |
| 朝廷に自反自責を要求 | × らしきことは昭和天皇 |
| 上下議事院の設置 | ○ ～衆・参両院 |
| 外国貿易 | ○ 条約改正の端緒　国富 |
| 学校の設置 | ○ 幼稚園～大学 |
| 勘定局の設置 | ○ 大蔵省　太政官札発行 |
| 明治政府（1868.4参与） | |
| **新政府の政体（小楠の思想）** | ◎ **五カ条の御誓文（由利公正）<br>今でも民主主義の土台** |
| 米の共和制度/(制度局判事) | △ 暗殺➡神道　※皇軍の独走 |
| 信教の自由 | ○ 明治６年キリスト教禁教廃止 |
| 賤民(被差別）の廃止 | △ 明治４年解放令（実質に問題） |

※**「政府の仕事に没頭」**→「酒を飲まない日も200日を超えた」

**【小楠の民主主義の思想】**は、民撰議員設立建白書から自由民権運動を主導した板垣退助や、福沢諭吉ら思想に共鳴する人たちに引き継がれ、圧政の時代を超え、曖昧模糊とした今の政治の中でも、なお一層の輝きを放っている。　（諭吉ー勝ー小楠）

福沢諭吉「学問のすすめ」（1872（M5)～1876　17編）

天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり。されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じ位にして、生まれながら貴賤の上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働きを以て天地の間にあるよろづの物を資り、以て衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずして各安楽にこの世を渡らしめ給ふの趣意なり。---



天賦人権思想に基づき、実学の奨励を説いた啓蒙書。

**小楠の目指した民主主義の世の中は、まだ来ていない。**

## 「位階」ネット検索　第一部その3「放置すれば嘘も真実へ」

| 位階 | | 参考受位（草）者 |
|---|---|---|
| 正 | 一　位 | **岩倉具視**　織田信長　豊臣秀吉　徳川家康 |
| 従 | | **大久保利通　木戸孝允**　**※徳川慶喜**　※調べ方で、位階が違う |
| 正 | 二　位 | 徳川各将軍　陸奥宗光 |
| 従 | | 上杉謙信　乃木希典　北里柴三郎(血清療法等) |
| 正 | 三　位 | **西郷隆盛**　山本五十六　柳田国男　**※横井小楠** |
| 従 | | 中島信行　津田左右吉　**※徳川慶喜** |
| 正 | 四　位 | 宮部鼎三　吉田松陰　**中岡慎太郎**　梅田雲浜 |
| 従 | | 吉良上野介　前原一誠　※尊皇の志士たち（贈４）　小泉八雲 |
| 正 | 五　位 | 野口英世　鳥居信二郎 |
| 従 | | 岩崎弥太郎　**※横井小楠**　石田三成 |
| 正 | 六　位 | 一般に名の知れた人 |
| 従 | | |
| 正 | 七　位 | はあまりいない |
| 従 | | |
| 正 | 八　位 | |

**【何が、学べるか】**

○　ネット情報は信用度が揺れる。
○　信用性が劣ることを逆手に利用すれば、人々が関心を抱かない内容は、嘘を放置するだけで真実にできる。

## 嘘を堂々主張して、真実にする　第一部その４「政治と歴史」

***昭和21年6月21日***　（**310万人の犠牲**で迎えた終戦の翌年）

衆議院本会議　日本国憲法案の審議の初め、当時の吉田茂首相の発言

日本の憲法はご承知のごとく**五箇条の御誓文**から出発したものと云ってもよいのでありますが、いわゆる**五箇条の御誓文**なるものは、日本の歴史・日本の国情をただ文字に表しただけの話でありまして、**ご誓文の精神、それが日本国のそのものであった**のであります。

この**御誓文**を見ましても、**日本国は民主主義**であり、デモクラシーそのものであり、**あえて君権政治とか、圧制政治の国体でなかった**ことは明瞭であります。

※五カ条の御誓文は、小楠の弟子である由利公正が、小楠の思想、言葉を五カ条にまとめたもの。（公正の孫、由利正道氏の「公正伝」にある。）

【意味】

昭和２０年９月２７日　昭和天皇がマッカーサーを訪問。天皇の命を助けるための「名分」が必要。（**アメリカでも日本国内でも天皇の戦争責任を糾弾する声がさかんであった**。）

***昭和２１年５月３日***極東国際軍事裁判開始

# 小楠思想の具現者　L.L. Janes

**勝海舟罷免＝神戸海軍操練所閉鎖　　横井左平太、大平兄弟は長崎のフルベッキの元へ。龍馬は薩摩へ。**

フルベッキに感化され、アメリカで勉強したいと小楠に打ち明ける。

「堯舜孔子の道、西洋･･･」は、1866年左平太、大平が出発（密航）するにあたって、小楠が二人に送った言葉。（1869年の小楠の暗殺で「遺言」となった）

横井大平



**「堯舜孔子の道、西洋器械の術をつくす。なんぞ富国に止まらん。なんぞ強兵に止まらん。大義を四海に布かんのみ。」**

野々口為志



## 明治３年　熊本維新始まる（実学党県政）

明治３年５月第二代藩知事に細川護久が就くと、実学派から抜擢し藩政改革を実施。藩立のすべての塾、学校の閉鎖。そのあと古城医学校、熊本洋学校開設。減税政策⇨九州各県に「減税要求」一揆群発。

1869年、横井大平が肺病で途中帰国。長崎で療養中、出張で来ていた野々口為志（小楠の門弟）に洋学校開設の必要性を熱く語る。１８歳でアメリカに渡り英語学習で非常な苦労を経験した大平は、早期英語教育の必要性を強く感じていた。県政を握っていた実学党の面々に相談、実現に向けて動き出す。

フルベッキは、アメリカの大統領（南北戦争時のグラント将軍）と教会に、趣旨に合う適切な人材派遣を依頼。推薦、派遣されたのが、ウェストポイント陸軍士官学校助教授のL.L. Janes（ジェーンズ）。

※　日本に着いて赴任地と任務が急に変更され、不本意ながら熊本へ来たという話もあるが。【嘘】

※　宣教師ヘンリー・スタウトは、長崎で**ジェーンズの計画、意気込み**を聞いて、適任者と確信した。

※　熊本での強力な支援者（小楠の門弟）が竹崎茶堂、細川護久（藩知事）・護美（弟）

| | 横井小楠 | L.L.Janes |
|---|---|---|
| 同じ考え | ○　何でも民のため<br>○　自分で考えて自分の心で会得してこそ生きた学問となる。<br>○　事実、実際、真実に基づく実学<br>○　歴史から政治の真理を導き出す。理想政治は堯舜三代の治世。民に親しむ政治こそ真理。 | ○　人々を救う（人々の啓発）<br>○　完全に習得した唯一の証明は、他人に教授できること。（自助の原則）<br>○　実物を見せる。実際にしてみせる。<br>○　ピタゴラスの定理のように、過去から現在、未来まで不変な真理を作り上げているものは何か。 |
| 相 | 天の道理とする（神は存在しない） | 神の存在を信じる（「**ｷﾘｽﾄの**ｷﾘｽﾄ教」） |

◎　小楠の息子、横井時雄はジェーンズに小楠の思想を重ね合わせ、父の姿を見た。花岡山の盟約事件で、家族、親族の猛反対にあっても逆に説得を粘り強く続けた。最後には家族も信者となった。

## 小楠の実学思想の具現者　ジェーンズの実践

**※学校は柱も立っておらず、一人の大工が黙々と木を削っていた。**

工事の遅れが、煙突（暖炉）を設置できるという幸運を招いた。

**ジェーンズが感じた熊本の感想**

- 衣食住のすべてが、もっとも原始的な状況からわずか一、二歩抜け出ているにすぎない。生活のすべてにわたって啓発の必要性を感じた。
- 小さな礎石におもちゃのような柱の家。
- 風邪が多く、肺病王国とされている。換気など健康を守る発想は皆無。自宅に煙突を作り、見学希望があれば大いに歓迎し、換気の重要性を説明。
- カーテンで「プライバシーを守る」



ジェーンズが上陸した小島港(荷上場)岸には多くの見物人。翌年、明治天皇が巡幸で上陸したのもここ。残念ながら、現在は埋めたてられ駐車場になり、跡形もない。

・ 藩主催の宴会でさえ、刺身、頑豆、醤油煮の海藻（海苔の佃煮か昆布の醤油煮）、豆腐、カリカリしてにおいの悪い大根、ごはん　----なにせ、すべてが塩辛い。
・ 野菜栽培の工夫がなされていない。
・ ありとあらゆる迷信がはびこって、進歩の妨げ。現実から乖離。権威者の考え、言葉は正しいとの誤解がある。私（Ｊ）の真意は、「日常生活の充実こそすべての基礎」だということ。
・ 岩戸観音見物、霊巌堂の寺で代々伝わる寺の宝物「うろこ」の話を聞いた。

**◎ すべてに差がありすぎて、言葉で説明してもイメージが湧かず、理解が難しい現実**

**目の前に具体的な物を見せ、実際に扱って見せ、扱い方を教えて、人々が扱えるようにする。　⇨　人々の合理的な「自立への道筋」ができる。（実学）**

① **西洋野菜の栽培（外国から種を取り寄せる）。西洋鋤(ｽｷ)の実演会。県内に広がる。**
　○ えんどう　○ ねぎ　○ キャベツ　○ レタス
　○ カリフラワー　○ トマト　○ ジャガイモ　○ アスパラガス

② **栄養の改善**
　○ パンの普及
　県内の麦を三度挽きと試行錯誤し、自前でパンが作れるようにした。パン食が一気に広がる。
　○ 「壊血病」で学業を途中であきらめる生徒が増加。
　牛を３頭購入。１頭解体。牛肉と野菜（キャベツ、玉ねぎ、ジャガイモ、トマト）のスープ。ローストビーフ、パン、ブドウ、カルフォルニアジャガイモ等を食事として与えた。Ｊ:「２，３週間で、やぶ医者どもがさじを投げた壊血病が跡形もなく消滅した。」


古城のジェーンズ邸

　○ 牛乳（赤ちゃんへの栄養補給）と牛肉を食卓へ

③ **文化啓発にニューヨークから印刷機械導入（東京、横浜についで三番目）**
　○ 改良型（インクの補充と印刷が自動化された）フランクリン印刷機の導入
　定期刊行物（全国紙も）、白川新聞⇒熊本新聞な。啓発に威力を発揮。

④ 通訳なしの英語だけでの授業
　○ 「政治が通訳依存の政策を続けるとすれば、将来に大きな禍根を残す。」
　○ 熊本洋学校は、「１０歳以上の洋学を志す者で、優秀であれば身分を問わない」という条件で募集され、募集人員は５０名。アメリカ風に卒業が厳しかった。

⑤ 日本最初の男女共学（横井みや、徳富初子）。

⑥ “キリストのキリスト教”を伝える。　アメリカには、腐敗、不祥事を起こす偽キリスト教の存在。
L.L.Janes：　因習的な愚行、迷信の覆いを切り裂き、超自然主義の雲の中から心を取り戻し、精神を自由に開放し、人間精神の発達に役立つキリスト教
※ 明治６年まではキリスト教布教は禁止。実質的には明治７年から９年までの約２年半。

⑦ 同志社大学総(社)長　２代小崎弘道・３代横井時雄・６代下村孝太郎・７代原田助・８代海老名弾正、総長代理(金森、市原)。

⑧ 「日本で骨をうずめたい.」と切望。教会のしきたり（教会のキリスト教）を嫌い、「火葬」と「山への散骨」を遺言とした。あくまで「キリストのキリスト教」信仰を貫く。
　ジェーンズと言えば「キリスト教の教育」が独り歩きをしている。あたかも、日本での仕事がそれだけのような印象を与えている。現実は逆で、熊本の「文明開化」を実現した部分が大きくて、キリスト教は一部に過ぎないのである。


娘アイリス(日本生まれ）とアメリカでの晩年のジェーンズ

**熊本の人々の啓発に全力を使った人物が正しい評価**

## 第二部　「外国人が紹介する小楠」（小楠の生きた環境が見える）

**William Elliot Griffis (1843～1928)**　　**アメリカ出身　外国人ヤトイ5,000人の第一号**



1865年 ラトガース大学入学。在学中、横井小楠の甥**左平太、大平の世話**役をした。下宿を見つけられない二人への義援金を贈る団体を紹介。その中の二人のキリスト教婦人が自宅に引き取ってくれた。
卒業後、日本への渡航を希望し、日本における中心的な外国人世話役のフルベッキに助言を求め、横井たちと関係のある越前藩を勧められる。御誓文に従って外国から日本へ直接呼ばれてきた最初の人物。「皇紀を振起」することに従事すべき「ヤトイ」、つまり俸給で雇われた外国人教師の大軍の先陣を承った碩学である。

| | |
|---|---|
| 1870(M3)12.29来日 | 東京で７週間過ごす。 |
| 1871.3.4～1872.1.27 | 越前福井藩校明進館で教える。 |
| 1872初～1874.7 | 明治政府に雇われ、大学南校(東京大学の前身）で理学、化学を教えた。当時の教頭が、フルベッキ（Guido Hermann Fridolin Verbeck 1830オランダ生。アメリカで神学、日蘭のつながりで長崎へ）であった。西洋（岩倉）使節団もフルベッキの政治的助言で実現した。グリフィスも明治天皇の信頼が厚く、幾度となく拝謁していた。 |
| 1874(M7).7帰国 | 執筆活動　　**※1915（T4） The Mikado（ミカド）出版** |
| 1926再来日(83歳) | 友に会い、大正天皇に　※1914The Late Emperor of Japan as a World Monarch |
| 1928アメリカで死去 | 拝謁。　　をハイカラ議員望月小太郎が出版。引用多し。 |



明治天皇

解説　「ミカド」は明治天皇を中心に幕末・維新と政治の移り変わりとそれに絡んだ人々を著してあり、グリフィス一人の執筆による。しかし、部分的に手直しを要し、翻訳も難しいということで見向きされなかった。**日本歴史に対しても天皇に関しても、ある部分大胆率直に歯に衣着せず**書いている。「万世一系の神天皇」であった戦前は、アカデミックな学者の、とうてい手を触れえない内容を含み、宮内省の「明治天皇紀」編纂に携わった諸歴史家など、おそらく目をむいて、でんぐり返るほどびっくりしたであろう。

**【例】大久保利通暗殺**　1878.5.14の朝、この大臣（大久保）の車が皇居に近づいた時、薩､土､加が彼を殺した。友人の西郷従道将軍が現場に着いてみると、大久保は頭を割られ、片手を切断され、胴に何カ所も切傷や突傷を受けて、６人の暗殺者が用いて赤く染まった刀のそばに、死体となって横たわっていた。自己顕示欲とブシドーとのひるむことを知らぬ代弁者たちは、すでにその数分間前、皇居の門衛に自首していた。

このように、グリフィスによる「ミカド」は、**理系の学者らしく具体的で写実的な内容**が特徴である。

**特筆すべきは**、この中には薩長同盟らしき場面は出てくるが、現在の日本史の中で、倒幕、薩長同盟の立役者として紹介される英雄**坂本龍馬の名前は一切出てこない**。グラバーも岩崎弥太郎も同様である。彼らは商人であって政治にタッチしていなかった証明でもある。日本人の好む英雄史観、皇国史観の中で、フィクションとして出現したものが実際の者として置き換えられた英雄が坂本龍馬である。

### 松平春嶽公の考え方（建白書）

**※下線部は小楠と同じ（師弟）**

**春嶽は江戸にある井伊首相（大老）の邸をたずね**、タウンゼント・ハリスとの条約に勅許もなく署名して、ミカドを侮辱することにないようにと説いた。そして、もしそんなことをすれば大名たちは将軍から離反し、ミカドに味方するようになるだろうと警告したが、はたしてそのとおりになった。

将軍問題にもからみ、井伊と、越前、尾張、水戸の領主とは、日本の開国を巡って延々と激しい議論を行った。井伊は、形勢が悪いとみて取ると独裁的な権力の行使にふみきった。三人の偉大な領主は蟄居謹慎を命ぜられた。彼らの幽閉が終ったのは井伊の暗殺の後であった。
**１８６２年朝廷へ開国への建白書**を差し出した。（**重要な国家的文書の一つ**）

今日の西洋の夷狄は昔日と大いに異なっている。昔日よりも開花し、寛容である。ところが諸外国が友好のちぎりをもって結ばれている時に、**皇国はひとり離れて立って天の動きの変化を知らず**。世界の友情を失ってしまった。皇国にとってこれにまさる恥辱はない。されば攘夷鎖国は甚だしく不可なるものである。加えて世界には五大陸がある。よってもし皇国が一致して攘夷を試みても、これは到底かなわぬ戦争であろう。ましてや**国論統一せざる時は、皇国は瓦甓のごとく砕け散るだけ**である。しかも、すでに条約を結んだ今日になって攘夷を行うならば、皇国の誠実を、我ら自ら踏みにじるという憂慮すべき結果になるであろう。今盛んに説かれている**攘夷は、夷狄を知らざる者の計画であり、皇国を破滅に導くもの**である。

交易により世界の変化の道に従ってこそ、皇国は豊かになるであろう。攘夷し、鎖国し、我らの関心をただ沿岸の警備にのみ限ることなどは、皇国の力と威厳とを増す道ではない。**都では攘夷がやかましく叫ばれている**が、この試みが真に成功することを主上が期待してあそばすとは思われない。

我らが西洋の「邪教」と呼んでいるものは、昔日のキリシタンとは異なるものである。皇国がこれを採用し実行したとして、国を破り滅ぼすごとき宗派は起こりえないと思われる。それよりも重要なことは、我らが法の如何であろう。もし、**皇国の民が異国に同化吸収されてしまうことありとすれば、その理由はほかでもなく、この国の政治が外国の政治に劣る所にある**に違いない。

されば、条約五か国の立場に我らも立ち、彼らの如く巨大なる軍艦を造り、沿岸の随所に要塞をきずき、皇国**みずからの船にて盛んに交易を始めよう**ではないか。我らに役立つものを外国に与えることなく、我らの必要とせざるものを与えつつ、アメリカの商品をイングランドへ、フランスの品をロシアへと運ぼうではないか。産物の交換を行いながら、そのうち最善なるものを我ら自身のために選びとる。かくすれば、四辺海なる我らが富国強国を実現することは、火を見るよりも明らかである。

外国を攻撃するに足るほど強くなった時、はじめて我らは沿岸警備を確立したと言える。外国との長く安定した修好通商により皇国の力がますます確固たるものとなれば、皇国は万代までも安泰であろう。もし外国が誠意をふみにじれば、咎はその国にあり、我らは直ちにこれを打ち破るのみである。これは今日の攘夷とは全く異なることである。**全条約国を同時に合して敵とすることではない**。さればもし一、二の国が不誠実な振舞いに出たとしても、敵は小勢にして、容易に打ち破ることができる。

事情かくのごとき時だというのに、**朝廷の施政は時勢に呼応していない**。西洋の夷狄を憎み、主上は彼らを蛮人と目され給い、「**打ち攘え、打ち攘え**」とのたもう。だが主上は彼らを蛮人と見られ給うても、彼らはやはり開花せるものである。現在、彼らは互いに確固たる友好関係にある。昔日と現代とを混同することのおおきな誤りなるは明瞭である。・・・・・



松平春嶽

私は天朝と上様（将軍）の施政とに徳を失わるることなきよう、**身の危険を顧みず**卑見を申し述ぶるものである。そしてたといお採り上げにならずとも、**生ある限りこのことを続ける**であろう。

これは一領国の意見を真実に代弁したものである。他の諸侯にはまだ私の卑見を採用されるよう説いていない。　だがたといほかに二、三の領国が同じ意見を持つようになったとしても、**朝廷は常に、いや最初から、攘夷を望んでこられた。私は都にあるたびに卑見を開陳してきたが、朝廷はこれをお用いにならなかった**。されどここに述べたのは、一領国が死にいたるまで抱く意見である。

私は都に上ることを申し出たが、最高司令官（将軍）は都より帰られたので、この建白書をその役人のもとへ差し出すにとどめざるを得ない。

わが家臣どももすべて準備ができており、都（京都）の周辺に何らかの危険が起こったなら、私は主上陛下の車駕の御跡に急ぎ参るつもりでいる。よってここにこの書面を差し上げる次第である。

再び、文は武よりも強かった。越前には多くの名誉が与えられた。**彼はソーサイ（総裁）**つまり（江戸の政治の）最高行政官に任命された。彼は**閣老を前にして行った画期的な演説**において、独裁的支配をやめ、ただ天下の人心に随って政治を行うべきこと、秘密主義をやめて公開主義をとるべきこと、正義を行動の基礎となすべきこと、および皇帝と国民の意思を常にうかがうべきことを強調した。

## 横井小楠についての記述

第八章　松平越前---将来を見通した改革者

P83 松平春岳(嶽)公は、皇帝から臣下に与えられる最高の栄誉を身に受けつつ、１８９０年に亡くなった。**この貴公子のために、いや日本のため、世界のために幸せだったことは、彼が自分でもしばしば認めた如く、横井平四郎（小楠）の弟子になったことである。**横井は王陽明の哲学（日本の「実際主義(ﾌﾟﾗｸﾞﾏﾃｨｽﾞﾑ)」)を奉じ、近代日本の形成に大いに働いた**予言者**、そして業なかばにして倒れた**殉教者**の一人であった。

P92 儒教の倫理と哲学を講じ、越前の精神的指導者であった横井小楠については、その主君に及ぼした影響力において、ちょうどジョージ・ワシントンの下にいた**アレグザンダー・ハミルトンに匹敵**すると言えば十分であろう。



初代アメリカ大統領G.ワシントン

１８６９年、京都で暗殺者の兇刃に倒れる前、彼はシナ語訳の福音書によって、「永遠のサムライ」を発見していた。歴史上のイエスがそれである。しかも幸いなことに、彼は教会の教養や伝統にとらわれないでイエスを見ることができた。彼はすぐに心を決め、その場でイエスのひそかな恐れを知らぬ弟子となった。

そして彼は、日本の聡明な知識人たちも、イエスを正しく知るようになった時、この救世主を受け入れるだろうと予言した。彼は二人の甥（**横井大平と左平太**）をアメリカに留学させ、後に続く多くの者の**先導者**とした。

１８６６年、私は、この若い二人をニュー・ジャージー州のニュー・ブラズウィック（ラトガース大学）で教えるという光栄を得た。

**１８６９年、京都新政府の会議において、横井は信教の自由だけでなく、エタつまり社会的賤民の地位を公民にまで引き上げることを主張し、実現を確実にした。その精神において、これはリンカーンの偉業にも比すべき仕事である。そしてリンカーンのごとく、彼の苦労は暗殺をもってむくわれたのだ。何という気高い生涯であろうか。**

１８８９年、憲法の発布に当たって、横井は当時もう皇帝と呼ばれていたミカドから、新日本の建設者の一人として追叙せられた。



横井小楠

**明治の栄光**

**明治の精神的栄光のまず第一に、最も偉大なものとしてあげられるのは、百万に及ぶ賤民の地位を向上させて、公民権を与えたことである。**エタは６世紀に仏教が輸入され、動物を食用として殺すことが宗教的に禁じられた後に発生した。ヒニン階級は徳川王朝が始まって以後に生まれた。ヒニンの大部分は乞食であった。

**横井平四郎は、たぶんこの国で初めてこれらの人々の地位を引き上げ､市民権を認めるべきを弁じた政治家であった。**横井は、**奴隷よりも低い状態にあった信教と賤民の二つの自由を提案して、２４時間も経たないうちに**京都でローニンに**暗殺された。**

**井伊直弼**　井伊直弼は、国を守る先見の明をもっていた。開国に踏み切らなければ、他のアジア諸国と同じ屈辱を被ったかもしれない。**危険に合うと頭だけ隠し、安心する駝鳥のよう**であった京都の一派は、厄災で生活が苦しくなると、ミカドや公家は幕府から数万両の援助をうけていた。それでもわがままを言いつづけた。

**薩長同盟らしき文面---協調計画という言葉はあるが、「薩長同盟」という言葉はない。**

雄藩長州は、海峡での外国人との戦い、都における同国人との戦い、藩の中での内紛と三重の浪費に苦しんでいた。唯一の救いの道は国の統一であった。（三つの苦がなくなる）

切実な国内統一の要求は薩摩藩の天才西郷によって日の目を見る運命にあったが、**この協調計画は、大久保の示唆によるところが大きかったと思われる。**西郷は二つの偉大な領国が今後いっさいの敵意をすて、古代のミカド親政に戻るというただ一つの目的に団結することを提案した。この壮大な考えは、*畳だけでなく床や土台まで変更する*ことを必要とした。

**征韓論・征台論**

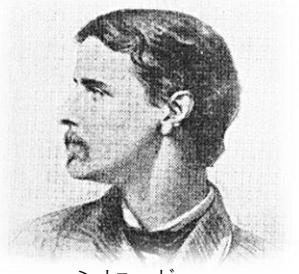
米欧回覧使節の一行は、帰国早々、今にも国を割ってしまいそうな内政問題に直面した。軍人階層は、**台湾の暴虐行為**に心をたかぶらせると同時に、**日本が西洋文明を採用したことを咎めてきた朝鮮の傲慢無礼な手紙**に狂気のごとくいきり立っていた。前サムライたちは開戦を叫び、朝鮮の征討を叫び、台湾の野蛮人膺懲を叫び、国民会議の即時開設を叫んでいた。

これらの計画すべてに岩倉とその同士はまっこうから反対した。アメリカが今は単に連邦であるだけでなく、真に国家となって統一していることや、ワシントンにおける中央政府の権威に強い感銘を受けて、岩倉とその仲間は、さしあたりあらゆる努力を、国内強化の方向にそそがなければならないと信じていた。何度も会談が繰り返されたが、議論はついにまとまらず、皇帝の前に持ち出された。**睦仁が戦争策を拒否した時**、西郷、副島、後藤、板垣、江藤の五大臣（参議）は**辞職した。**

勝は私に、皇帝や、またあらゆる党派や役職の人々の行動について、いろいろ語ってくれた。

**A.B.Freeman-Midford「Memories by Lord Redesdale」（リーズデイル卿回想録）1915年ロンドンで出版**

（その第18章～26章が日本関係）➡**「英国外交官の見た幕末維新」A.B.ミットフォード著**として、1998.7**(H11)訳本**出版（講談社）



ﾐｯﾄﾌｫｰﾄﾞ

1866.10.16来日、1870.1.1離日（帰国）、この後数回訪日。1906年には国王エドワード七世の名代としてコンノート殿下が明治天皇にガーター勲章を奉呈するために来日する時の首席随員。英語、フランス語、中国語、日本語が堪能。

**１８６７年、大阪城で将軍（慶喜）にイギリス公使謁見**

「親しく話した後で、将軍は夕食をしていくように勧めてくれた。大君と御老中を相手に親しく食事をするなどということは、夢の中でしか考えられないような予想外の出来事であった。宴席半ばで、**将軍が立ち上がって、英国女王の健康を祝して乾杯**したが、このような外交辞令は、それまで「日出ずる国」では全く知られていなかったことであり、なおさら我々を喜ばせようとする気持ちの表れであったに違いない。**パークス公使は、それに答えて将軍のために乾杯**した。

**薩長同盟の記述はなく、「薩・長・芸（広島）三藩連盟成立」の記述はある。**

このあと、山口容堂が慶喜に大政奉還を建白。

**薩摩藩姫(篤姫)誘拐事件**

江戸から極めて悪い知らせが届いた。十三代将軍の未亡人である**薩摩の姫君が、江戸の薩摩藩士によって誘拐された**ので、幕府の家来が復讐として、三カ所の薩摩屋敷を焼き討ちしたとの知らせであった。薩摩藩士は藩公所有の蒸気船に乗って海へ逃れたが、幕府の船が追跡しているとのことであった。

**土佐の山内容堂について**

土佐の隠居容堂公は、当時の激動の時代に現れた多くの著名な人物の中でも**特に傑出した人物**であった。薩摩の島津三郎、宇和島の伊達（宗城）、それから容堂と、すべて隠居であるがそれぞれ自分の藩での事実上の統治権力を保っていたのであった。その中でも特に偉大なのは容堂で、我々がこれから会おうとしているその人である。彼は高い備えた先見の明のある人物で、**他の大名よりはるかに物事の政治的判断に優れていた。**徳川家の二百万石の領地引き渡しに対しての容堂の提案、

「そんなものを没収しても、国家の収入の中核としては何の役にも立たず不合理だ。**すべての大名は藩の所有する財産を国にひき渡し**て、自分の為には相応の地位を維持するに足る一部の資産を残すにとどめるべきだ。」と提案。

その犠牲は実際よりむしろ表面だけのもので、もし日本帝国が一つに統合されれば、彼らは政府の機構全体を自分たちの陸軍又は海軍によって維持する必要性から解放されるわけで、領地を手放す犠牲を償って余りあると予見していた。

**薩摩やその他の藩は、初め、この案に尻込みしていた。彼らは、容堂ほど時局を認識しておらず**、容堂が指摘した**時代遅れの封建制度にまだ執着**していたのである。最後にかれらは譲歩し、容堂の英知が勝利を収めることになった。

※松平春嶽も同様の意見を持っていたので、容堂と話は通じていたと考えられる。

**明治政府の初期の公議所の議案は多岐にわたる。**そのうちの「**切腹禁止**」**についての意見**

- 日本古来の精神である大和魂の真髄であり、その本義に対する忠誠をもって実践する者である。
- それを禁止することは政体の柱を一本外すようなものだ。
- 切腹は本邦の美俗にして海外諸国に卓越する所以である。
- 士族の廉恥心を養う習慣は、存続させねばならない。皇国が外国に勝るのは疑いもなくこのためである。
- 諸外国の柔弱をまねして、どうしてこの習慣を禁止しなければならないのか。
- この神の国において、このような法案を議論する必要はない。
- 切腹は神州の正気に発源し、大和魂の寓するところである。決して禁じてはならない。
- 切腹が皇国のみに行われ、外国では行われないのは、皇国の皇国たるゆえんである。

**この種の発言は、うんざりするほど数多くある。**これは**自分の国が神国として優位にある**という信念が、いまだに発言者の国全体に広く行きわたっていることを示すものである。この問題が投票によって決定されることになった時、廃止賛成は３名、反対が２百名、棄権が６名であった。動議は否決された。しかし、この考え方がある限り、**今後起こる動乱を抑えることは不可能**と判断し、**政府は「帯刀禁止」の法律を成立させた。**

**拝謁の打ち合わせ**



パークス

事前に、天皇への**パークスの謁見の段取りや打ち合わせ**について後藤象二郎と伊達(宗城)公が説明に来た。

> 天皇が勅語を読み上げ、その写しを山階宮に渡し、山階卿がそれを読み上げてから伊藤(博文)に渡し、伊藤が翻訳するように取り決められていた。最終的にパークス公の手に届き、パークス公が天皇に直接挨拶する。他の外国人は、山階宮が天皇に紹介し、天皇から「苦労」の言葉がある。

謁見当日、**公使の行列に二人の浪人**が襲い掛かってきて多数のけが人が出た。随行していた後藤象二郎と中井弘蔵が、先頭になって戦い、公使を守った。謁見は３日延期された。後に、イギリス女王から名誉の剣が二人に贈られた。

**天皇の権力の回復と神道とのつながりについて**

天皇の権力回復が、**天の神様を先祖とする神道の復活**に、必然的につながったことは驚くに値しない。**天皇の周辺の頑迷な思想を持った人々が、新しく政府の要員なった**ものの、以前とは物事の条件が変わっている現在、宗教的非寛容は国にとって必ず障害をもたらすとは少しも思わずに、昔ながらの先祖崇拝の熱に燃えて、**キリスト教を最大の敵**とみなして、その**絶滅**を要求したのである。浦上はキリスト教の信仰の中心として特に名高い所であったから、必然的に、その住民が最初の犠牲者となった。

京都の**朝廷の保守派**は、村人たちを**切り殺して絶滅させるべきだと決定**した。私と交渉のあった閣僚たちは、偏見のない思想を持った度量の広い人々であったが、彼らとしては、重要人物の古い公家たちのことも考慮せざるを得なかったのである。彼らは、大昔の神秘的な暗闇から急に明るい場所に引きずり出されて、ほとんど目が見えない状態であった。

伊達公と東久世卿に、はっきり分かっていたのは、**事態を破滅に導く恐れのある何人かの、より退嬰的な貴族をなだめ**なければならないことであった。

**明治２年１月５日朝廷での「千秋万歳」の踊りがあった。横井小楠はその帰り道に暗殺された。**

**明治２年８月エジンバラ公の日本訪問について**

日本政府は、私（ミットフォード）がエジンバラ公の訪問を成功させるために骨折った、その苦労に対して、深く感謝の意を表し、殿下の出発に際して立派な感謝状と漆塗りの箱を贈ってくれたので、私は英国外務省の許可を得て、それを受け取った。

※TVの歴史番組では、明治政府は応接の仕方を知らなかったので、英国側の不興を買った事になっている。**接待は相談しながら行われた**ので、**TVは正しいとは言えない。**

**本文に登場する人物等**

孝明天皇、薩摩、長州、土佐、宇和島、会津、明治天皇、薩摩藩主、小松帯刀、伊藤、木戸、井上（馨）、秀吉、慶喜、素晴らしい人物：山内容堂・後藤象二郎、中井弘蔵、鳥羽・伏見、若年寄堀内蔵頭：徳川の家名に傷をつけた慶喜に切腹を進める、西郷、乃木、イギリス公使パークス、大阪城、商人グラバー、アイヌ、加賀藩(日本で一番裕福は貴族)、五代、滝善三郎(神戸居留区に発砲命令、切腹)、ウィルス医師(死にかけている容堂を治癒させ、命を数年伸ばす）、山階宮、三条大納言、岩倉(最も柔軟な思想の持主)、東久世卿、西園寺三兄弟

※　本文中、**坂本竜馬の名前は一切出てこない。**グラバーには、**“商人”グラバーと冠**をかぶせてある。

**Donald Keene 「明治天皇」上・下** アメリカ出身の学者（**戦後**） 英語表現事典(1982)等でも有名

**１８５７年、ハリスの作戦（対堀田正睦）**


ハリス

米公使駐在を認めれば、英仏も簡単に攻められなくなる。アメリカは英仏とは違う。アメリカと条約を結べば、アヘンの禁輸を保障できる。今、英仏は北京を攻めている。勝利は間近だ。成功すれば、フランスは朝鮮、イギリスは台湾を要求する。その後、英仏は日本に過重な要求をしてくるだろう。その条約に失敗すれば戦争になり、北海道、サハリンは英国に苦も無く占領されるだろう。

***尊皇派の本心***

**尊皇派**は、**天皇崇敬を明言**していたが、その忠誠は反幕府の上に成り立っていた。権力が幕府から廷臣たちに変わるのが本当の願いであった。幕府を倒すことによって得られる公益、つまり、**倒幕によって日本がどれだけよくなるのかといった具体的な理念を通して示された訳ではなかった。**

**長州の陰謀（*ミカド誘拐未遂事件*） １８６４年禁門の変（蛤御門の変）**

皇居の諸門を襲って、ミカドの身柄をとらえようとした。この誘拐者たちは、**天子を捕虜**にし、この天子を通して自分たちの願いを実現しようと望んでいた。銃弾はミカドの戸口まで及んだ。

W･E･Griffis

戦火の煙がはれると、それは**恐ろしい破滅、荒廃の場面**となっていた。少なくとも１８の公家の邸宅、４４の大名の屋敷、２７，０００の家が焼けた。庶民の住居のほかに、６０の神社、１１５の仏寺、４０の橋、三つの劇場、およびエタつまり賤民の村ひとつ、破壊されてしまった。

９月５日、連合艦隊の下関攻撃があったため、藩主率いる長州からの追加援軍ができなくなり、長州は地元に引き上げることになった。

***明治新政府による神仏分離、廃仏毀釈の理由***

（５３８年）仏教伝来以降、精神的な支配力を強め、ボンズ（梵僧、坊主）はミカドを説得し、**「スメラギ」という古い呼称をやめ、シナの方法に従い「テンノウ」**（天の王）とか、「テンシ」（天の子）という称号を用いさせた。やがて、人形を帝位につけておいて、自分は表に出ない形をとった方が人目につかず大きな政治上の活動が行い易いことが分かってきた。

**僧侶たちの策謀**は、日本の中心的支配者を人間ではなく**偶像に仕上げた。**誰が帝位につくかは問題でなく、天皇という「地位」「職名」が重要であった。

**江戸城無血開城実現に向けてのハリー・パークス（英公使）の仲介**



**勝　海舟** 「官軍が無理な要求をしないように。要求すれば**戦争も辞さない**。西郷ならそうならないようにできる。」と仲介をパークスに依頼。

**西郷隆盛** 交渉の助言を求めてきた西郷に、

「慶喜とその一派に対して苛酷な処分、特に体刑をもって臨むならば、**ヨーロッパ諸国の輿論は、その非を鳴らして新政府の評判を傷つける**ことになろう。」と警告した。

※イギリスきっての日本通アーネスト・サトウの記録から

後、**維新の財政的基礎を築くため、イギリスの銀行が金を貸す**ように尽力したのは、このイギリス公使パークスであった。彼は、三度も命を狙われたが、この日本人の友を殺すことは出来なかった。　※ミットフォード「英国外交官の見た幕末維新」

**維新、思想の上での指導者は越前（松平春嶽）**

**大久保利通は「維新の筆」と呼ばれ、伊藤博文は卓越したその実行者**であったが、**彼らの思想的な指導者は春嶽であった。**かれは、１８６９年２月には、早くも皇帝に建白書を出し、自分の城、領地、及び藩民名簿の返還を申し出た。封建制度を一挙に廃止するこの方法は、天皇の名のもと実行されるべく、薩摩、長州、土佐、肥前の四大名からの請願（版籍奉還）があった。（土佐の山内容堂も同じことを提言している。＝春嶽との連携が見える）

※春嶽は、小楠の弟子で、理解者、崇拝者。小楠の思想を世事に施す（実現）地位にもある。

春嶽から建白があったということは、小楠とよくよく話し合った上のことであろう。

**徳川慶喜の議定への就任要請に尾張、越前が大阪に赴く**


徳川慶喜

**尾張の徳川慶勝、越前の松平春嶽が説得にあたった。**慶喜は一旦は了承した。会談の後、周りからの意見に動かされ、京都の天皇を囲む反乱分子を追放すべく大阪で挙兵し京都へ攻めあがった。１８６８年鳥羽・伏見の戦いとなり幕府は薩長に敗れた。

※補足
- ※これを機に慶喜追討令が発せられ、**東征軍**が形成された。
- ※鳥羽・伏見の戦い以後、江戸まで戦いは皆無であった。これは、徳川慶勝と松平春嶽が、家来を遣し、**東海道、中山道の大名に戦いをしかけないように事前に説得し、確約の「勤王証書」もらっていた**からである。
- ※「錦の御旗に恐れをなして戦意を喪失した。」というのは、実態を表していない。「**幕吏：ミカドは金も政治的な権力もなく、日本で尊重される何者でもない。彼は一介の価値なき人に過ぎない。**」（**ハリス日記**）
  M13. 天長節。**この国の人民が、その君主にほとんど関心を寄せていない有様を見ることは情けない。警察の力で、家々に国旗を立てさせねばならない**のだ。自発的にやるものは、ごく少数だろう。（**ベルツの日記**）

**横井小楠暗殺**　　新暦の２月１５日

新年（旧暦）の屠蘇気分を打ち切るように、ある事件が起きた。１月５日未の刻頃（午後２時前後）、参与横井平四郎（小楠）が駕籠で退朝の途次、寺町通を過ぎた時だった。凶徒数人が突如、短銃を放って横井の駕籠に迫った。横井は駕籠を捨て、短刀で立ち向かおうとした。横井は病後で弱っていた。体が思うように動かず、あえなく兇刃に倒れた。横井に随従する門弟、従僕は防ぎ及ばず、兇徒は皆逃げた。

横井暗殺の報せが届いた時、**天皇は大いに驚いた。**直ちに侍臣少納言長谷信成を横井の寓居に遣わし、事の真偽を確かめさせた。**負傷した門弟、従僕等に、天皇は治療手当として金４百両**を賜った。翌日、天皇は熊本**藩主細川韶邦に横井を手厚く葬るように命じ**、祭資金として特に**三百両を賜った。**この時、**明治天皇が見せた敏速かつ心温まる措置**は記憶に残る。


岩倉具視

「横井にとってキリスト教は、いわば実用主義ないしは合理主義を支える倫理のようなものだった。西洋の科学技術ならびに経済力と、キリスト教との間に密接な関係があることを見出した点で、**横井は後年の日本の思想家より洞察力に富んでいた。つまり横井は、近代性とその裏にひそむ倫理との関係を理解したのである。**横井暗殺の下手人は、伝統的な日本の思想の純粋性が外国の影響によって汚されることをひたすら恐れた。**暗殺犯は、横井の学問が新しい日本にとって価値があるということを理解しようとしなかった。**

横井は、時代に先んじた人物だった。ジョージ・サムソムは横井の政治思想の発展を跡づけ、次のように考えた。

ついに「**横井は、普遍的な平和と友愛の観念を説くまでに到り、一種の『一つの世界』説を提起した**のである。」と。未だこの時期、天皇に世界の地理や歴史を進講する侍読はいなかった。科学については言うまでもない。

**小楠亡き後、天皇の教育は侍臣たちの一大関心事となった。**木戸の日記に、特にこの先十年間、繰り返しその心痛のほどを語っている。岩倉は三条実美への手紙に、「年若く経験の乏しい天皇には、君徳の培養が肝要である。」と書いている。和、漢、洋の学識のある者の選定が始まった。そして、白羽の矢が立ったのが**横井小楠の弟子である元田永孚**であった。

**１９００年（Ｍ３３）．５．９　東大教授２５年・皇室付きのドイツ医師エルヴィン・ベルツが日記に次のように書いている。**


伊藤博文：

一昨日、有栖川宮邸で東宮成婚に関して、またもや会議。その席上、**伊藤（博文）の大胆な放言**には自分も驚かされた。半ば有栖川宮の方を向いて、伊藤のいわく、

「**皇太子に生まれるのは、まったく不運なことだ。生まれるが早いか、至る所でエチケット（礼式）の鎖にしばられ、大きくなれば、側近者の吹く笛に踊らされねばならない。**」と。そういいながら伊藤は、**操り人形を糸で踊らせるような身振りをして見せた**のである。

※山県・松方・清浦らとの写真（有朋の威圧におされる雰囲気の大正天皇）

**徳川家康の遺訓「尊皇」の本心：**　異常なほどの尊皇の本音は**“神に祭り上げる”**ことで、ミカドの政治的権力をあとかたもなく消し去ることにあった。皇居に押し込めるための体裁を整えたのだ。事実、**皇族の一人を“皇室からの人質”にして、江戸に住まわせた。**この人質は、江戸は上野の門跡として事実上監禁した。**宗教的皇帝（天皇）と世俗的皇帝（将軍）を明確に区別**した。戊辰戦争で、**上野に皇室の人質として監禁されていた輪王寺能久親王（北白川宮）を押し立て、上野の彰義隊**、奥羽越列藩の新政府への反抗が続いた。

## 付録：　Ｍ８前後から、我々の知らない、知っていることと違う情報は？

**「ベルツの日記」　編者トク・ベルツ（息子）　一部紹介**



**ベルツ**

**1877** 10/4 革命は７カ月続いたのち反乱軍は完全に鎮圧された。西郷は傑出した軍人であり、指揮者であることがわかった。首のない胴体がまず発見された。後には首も見つかったとのこと。桐野、別府その他はハラキリを行った。
**M10**

**1878** 3/1 築地の大劇場に、フォン・シーボルトを介して招待された。シーボルトはドイツ人だが、幕府時代は"オランダ人"と偽称して入国していた。

**1880** 4/10 **天長節。この国の人民が、その君主にほとんど関心を寄せていない有様を見ることは情けない。警察の力で、家々に国旗を立てさせねばならないのだ。**自発的にやるものは、ごく少数だろう。
**M13**

11/8 **鎌倉の名高い大仏。**10年前に日本政府は、日本の持つ最も立派なこの青銅像を、地金の値段で外人に売り払うという、とんでもない考えを起こしたのであった。幸い、取引の話は沙汰なしで済んだ。

**1888** 12/15 北白川宮の病気の王子を度々見舞った。王子は一歳半のまれにみる美しい幼児である。宮の夫人は伊達家の姫君である。北白川宮は、天皇の叔父君あたり、ちょうど維新当時、1868年には**上野**の寺で院主だった。**宮は、わずか25歳あまりで、将軍派により天皇に対抗して擁立された**（上野戦争）が、のちドイツに派遣され、そこで完全な軍隊教育を受けて大尉にまで昇進した。
**M21**

**1889** 2/11 憲法発布。玉座の左右から、それぞれ一人の大官が一つずつ巻物を持って進み出た。その一人はもとの太政大臣三条公だった。公の手にあった方が憲法である。天皇は、他方の巻物を手に取ってお開きになり、声高らかに読み上げられた。かねて約束の憲法を国民に与える決定を述べたものである。式はわずか１０分で終わった。残念にも森文相が神道の西野某に暗殺された。
**M22**

10/18 **大隈（重信）外務大臣、ダイナマイトで暗殺未遂。**犯人来島恒喜はその場で逮捕した。やっと条約改正寸前にまでこぎつけた時に、突如として多数の日本人が不安を抱き始めた。右足の骨が、まるで袋に入っているかのように、"がたがた"音を立てた。上腿切除手術のほかに手段はなかった。

**1901** **7/11** **本日、天皇臨席のもとに、大学の学年修了式と卒業証書授与式。**

**1904** 10/20 トーマス・**グラバー**のもとで午餐。彼は最古参の日本在留外人である。隣席は、銀行家で鉱山、ドック等の持ち主である若い**岩崎**だった。彼の父（**弥太郎**）も、自分は良く知っており、非常に太っ腹で、寛大な人物だった。また、大阪の船会社の重役で神戸の**松方**がおった。かれの父は有名な政治家の松方（正義）伯である。　※日露戦争中の事である。
**M37**

小楠の口ぐせ

何でも民のため
国を治むるは民のため
君を立てて政を為す
皆　民のため

# 第三部　「日本人が紹介する小楠」（関係外国人の言葉の引用を含む）

| | | |
|---|---|---|
| **2000** | 年頃 福井郷土史教育副読本 | 「幕末の福井藩にとっては、無くてはならない人物だった。」「小楠は、今日ではふるさと熊本でも、その素晴らしさを認められています。」 |
| **1821** | 年頃 **下津久馬と小楠**（12歳） | 「経国の志を興し、他日国事の振興に当たらん。」 |
| **1837** | 年頃 小楠が元田永孚へ | 「およそ**学問とは**古今の治乱・荒廃を見抜き、自分の知識を縦横に通用させることである」当然学ぶことは広く、「和漢の歴史」に通じ、小さく近視眼的であってはいけない。中国の「二十二史」などは一読すべきである。それに加えて「文章」を学べ。自分の志を十分表現するのは「文章」である。 |
| **1839** | 年頃 甲府勤番　**長野清淑**<br>小楠に寸鉄を加えた | 孝亭（朱熹）の史は、はなはだ厳酷であるが、**平允**（へいいん：穏やかな性格）はしばしば鉄案（その道の権威者の動かしがたい意見）をとって翻す。 |
| **1840** | 年頃 江戸を去る時(遊学)<br>真剣に学んだ様子 | 「ある時は夜更けに起き、読書して思うところあり。心に会得すれば、これを文にまとめ、情に触れるものがあればこれを詩につづった。また、大いに朋友と会し、心をひらいて話し合った。」 |
| **1844** | 年頃 時習館訓導中村恕斎 | 「私の受け持っている京町赤尾連が横井平四郎が唱える実学に同調し、私の教えを「**文義章句の学**」と一斉に非難し、自然と横井へなびいている。」 |
| **1845** | 年頃 訓導達が集まって | 「実学連と唱えて、坪井・京町の諸生たちが党を作り、いろいろと時習館の教育方針を批判している。」 |
| **1847** | 年頃 小楠から長野濬平へ<br>南関惣庄屋木下初太郎<br>の塾の塾主に招かれた | 「**最初から多くの書を与えるのはよろしくない**。後々塾生から読みたい書を求めて来たら、その時与える。面白味は格段に違う。その時期を待つ」<br>塾生の自発性を引き出す教育的配慮＝小楠の実学教育の真骨頂。 |
| **1847** | 以降 講義の様子　長岡是容 | 「臨機応変を主とし、章句の末にこだわらず、**活用を以て第一**とする。」 |
| | 元田永孚 | 「先生曰く、学をなすには、すべからく古今に通じ、大義を明らかにし、活眼を開きて、これを**世務に施す**べきのみ。 |
| | 肥後藩庁 | 「とかく何事も当今の有様（時事問題）に引き付けた講義」 |
| | 竹崎茶堂 | 「まず年少者に朗読させ、且つ一通りの字義の講釈をやらせ、しかる後に門生一同に自由に意見を吐かせ、議論を十分尽くさせた後で、先生がそれを講評し、且つ自分の意見を述べ、それで会を終るのが常であった。先生は大学を借りて、**随時その時期の問題に対する意見なども吐露**したものでした。」 |
| | <br>茶堂 | |
| **1851** | 年頃 読書論（門弟に答え） | まず**第一番にわが心**也。心を持って読書すれば「格物」（本質、本物）も見え、知識も章句毎に広がるが、「空心」で何十年読書したとしても何の益もない。学問が進むか進まないかは、**人のために学ぶと己が為に学ぶとの違い**に在る。<br>「書物上だけで合点することは、碁を打つものが実際に碁を打たずに、「碁経」に書かれていることで合点するようなものである。いかに定石を覚えたと思っても、実際碁をうってみると真っ黒になってしまい、少しもわかっていない。これがいわゆる「**世の文義者**」の理解である。 |
| **1855**<br>**（安政）** | 年頃 海国図志を読了<br><br>内藤泰吉 | 小楠著作「海外の形勢を説き、併せて国防を論ず」<br>「方今五大州の中で、ロシア、イギリス、アメリカが鼎立（三立）する状況にある。他の国は、いずれかに組みしている。」と述べ、三国については詳説している。<br>世界がこの状況にあるのに、<br>「**尊皇攘夷者は、無識・無策の者**である。」「俗にいう和魂なるものは、却って外国人を無道の者、犬畜生どものように捉え、甚だしくは、あだなす仇として拒否している。**隘陋**（あいろう：考えが狭くてみすぼらしい連中）が、**国家が新しく生まれ変わる路を誤まらせる**のは、実に嘆かわしいことである。」 |
| **1855** | 沼山津転居 | |
| **1856** | 肥後勤王党との決別<br><br>林桜園 | 肥後勤王党河上玄斎から絶縁状<br>**小楠の天**：万物を支配する真理・正義（自然的天）。自然主義・合理主義<br>**桜園の天**：超自然的な神の霊力。八百万の神の霊力で異国船を撃沈する。<br>桜園：「どれだけ夷船が来ようと、神風が吹き飛ばしてくれる。」<br>「身の程を知らない夷どもは、間もなく滅ぶと神が言っておられる。」<br>玄斎：「夷らの汚い心は帆にもでて、柱も真っ黒く見える。」<br>肥後勤王党の考えは荒唐無稽なものとしている。 |

**1857** 招聘交渉に村田来訪

村田の紀行文「関西巡回記」に四時軒訪問時に、小楠から受けた説話。

有道・無道

「**道は天地の道で、我が国とか外国とか云う事はない。**道があればその国は世界でも中央に位置し、無道であれば未開の国となる。無道であれば、日本であろうと支那であろうと夷(未開の)国である。」

狂った国学者

「**国学者流の見識は大いに狂っている。**」

このままでは、最終的に支那と**日本は愚かな国になる。**日本は西洋に大いに劣っており、それに比べてアメリカは日本をよく見て、無理・非道なことをせず、日本を諭すように少しずつ開国に向かわせようとしている。にもかかわらず、日本中にはびこって悪い影響を与えているのは皆下人共である。」と、**国学者たちを狂人扱い**している。

仁義の国

「日本国は仁義の大道を明確にし、世界の世話やきになり、世界第一等の**仁義の国**になる道を歩まなければならない。」と主唱している。

**1859以前** **是容**の小楠論



是容は1813年3月13日生、1859年9月6日46歳で死去。

その説くところは、よく聞けば**不勤王論でもない**が、最初から憲法論の様であるから、聞き分けて聞かぬと誤りが多い。いつも説の立て方は妙であるが行政をやれば喧嘩をする。**改革をするなら根からひっくり返せ**と云うようなものである。

**1860** 年頃 小楠の講義

「**良心を拡充して、日用事物の上に功を用いるのであれば、すべて学問でないものはない。**後世の学者は日用の上での学問に覚めず、ただ書物について理解するだけである。古人の学ぶ姿勢を学ぶのではなく、所謂**古人の奴隷**になってしまうことである。」

**1867** 福井、江戸、京都時代

家族への手紙

息子又男について。「おできはどうか。言っておいた書物は読んだか。」

娘みや子について。「乳離れは早い方がよい。手習いは進んでいるか。」

**1868**

息子又男について。「読書をしっかりするように。英語学習も怠るな。頑張れば、筆や書物を褒美としてやる。」

娘みや子について。「おこられたら聞くようにしなさい。聞かなければ何もやるな。人として良くなれば、褒美に衣類や菓子をやる。」

親戚まで含めた**女性軍には、一人一人の個性を考えて贈り物**をしている。



妻　つせ

義母矢島鶴について（嘉永６年57歳で死去）

「義理に厚く、情け深く、人に対して憐みの心をもっていました。倹約を常としていたが、いざというときには貯蓄してきたお金も惜しみなく出した。２男７女をもうけたが、真心を第一として育てた。

鶴の「やってみせ、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば、人は動かない。」という子への教えがある。※同じことを、後の山本五十六も言っている。

**1864** 井上毅「沼山対話」

キリスト教の扱い

井上の質問に答えて

外国では八部通りが信者であり、イエスの説は釈迦の教えより一層深い教義である。また、「人に善を勧める」ことを主眼にしている。



井上毅

「洋人の万国一体四海兄弟は天理に叶うか」

キリスト教は倫理を重んじており、日本に入ってきたら**仏教との宗教戦争**は避けられない。よって耶蘇教の布教は阻止すべである。昔の耶蘇教は「ただ愚民を教解するまで」だったが、近来では信仰だけでなく「別に一種経綸・窮理の学を発明」して耶蘇教に付益し、これがまた「**堯舜三代の治道**」の「**民生日用を利すること」に類似・共通**した点がある。

「**差別なく皆同じ人類であるから**、互いに交通し、交易の大利を通じることが今日自然の理勢と考えられる。」

**1865** 「沼山閑話」

元田永孚の横井小楠訪問の記憶「沼山閑話」

横井の本来立てて居る趣向は、孟子によったもので、



元田永孚

「**何でも民のため、国を治むるは民のため**」という本体を立てて主義とした人である。例えば道路を拓き、水利を通ずる、皆な政治の眼目であるけれども、これは民のためであって君の為でないという論旨であった。

**民を本当に生かすのが天意であり天道**である。「人民の声」は「天の声」即ち「**天声人語**」であるとして、天子の政治姿勢に強く反省を求めた。

「宗儒、治道を論ずるに、三代の経綸の如きを聞かず。」、と朱子を批判している。

**1865**　**フルベッキ（ヴァーベック）と小楠**と「シナ語訳聖書」の関係



フルベッキ

１８６４年５月、左平太と大平は海舟の「神戸熟」に１年間入塾。
１８６５年６月、二人はフルベッキの「長崎英語伝習所」で３カ月ほど英語を学んでいた。当時フルベッキは、日本における外国人受け入れの中心人物として,積極的にキリスト教関係の書籍を輸入し、１８６１年には大小、漢文英文約２３０冊に上った。

**※ザ・ヤトイ**は、五カ条の御誓文(知識を世界に求め、皇国を振起)後に雇用された者を言う。

フルベッキの日本人観
「日本人は漢文の書物を良く受け入れる。漢籍を読みうる教育のある武士階級に対しては、我々はすぐにでも、物静かに福音を彼らに伝えることができる。」

○ 1862年に漢訳の新約聖書を借りて行った肥後の人がやってきて、「藩主のために一艘の船を購入する助言をしてほしい。」と言った。
○ 1866年、監督教会派のウィリアムズ監督が肥後の藩士荘村助右衛門(省三)に洗礼を行った。荘村は小楠の門弟で、荘村が持っていた**聖書を小楠が読んでも不思議**はない。

**1868**　2　ｱﾒﾘｶの２甥へ　「京師にて日本政府相立ち、上院・下院人材相集め、諸事議定の趣向にて、今より**両三年には**どうなりと落着、安堵の地に至り申すべく候。」⇦五カ条の御誓文の具現化への道筋が固まる、ということか。

**1869**　小楠暗殺の背景を「斬奸状」に探る

斬奸状（柳田直蔵が携えていた）

柳田は、襲撃時にけがを負いその場で逮捕一週間後に死亡。

≪背景を考える≫

横井平四郎、この者是れ迄姦計枚挙遑あらず候得共、　----民主政治への諸提言(修正)
姑（しばら）くこれを舎て、今般夷賊（西洋人）に同心し、
天主教を海内に蔓延せしめんとす。　----小楠の「信教の自由」提言
邪教蔓延致し候節は、皇国は外夷の有と相成り候事顕然なり。----脅威に感じるのは誰？
併朝廷御登庸の人を殺害に及び候事、深く恐れ入り奉り候へ共、----朝廷軽視か内通者
売国の姦要路に塞がり居り候時は、　----「要路」とは神道国家主義への道（岩倉が小楠を重用＝）
前条の次第に立ち至り候故、
已むを得ず天誅を加える者也。　----朝廷が小楠を処断できないから仕方なく天に代わって実行する。＝朝廷内不満者の声



天下有志　----「天下」を考えての行動だから

暗殺直前に、小楠は神道国家に真っ向から反対する改革案、即ち五カ条の御誓文に従う民主主義国家の理念による修正案を続々と打ち出し始めていた。それを念頭に、上記の斬姦状を平易な表現に書き換えると、

横井平四郎、この者はこれまで神道国教化の政府方針に反する修正案を続々出してきましたが、
しばらくこれを置いといても、今般は、信教の自由を言い出し、
キリスト教を国内に蔓延させようとしています。
邪教（キリスト教）が蔓延した場合には、天皇の国は外国のものとなることは明白です。
しかしながら、朝廷が登用している人物を殺害することは、深く恐れ入り奉ることですが、
売国の姦（横井小楠）が、天皇中心の国家建設の邪魔をしております今、
前条の次第（殺害）に至りました。
やむを得ず天誅を加えたものです。
天下のことを思う有志（実行犯）

| | |
|---|---|
| 上田　立夫 | 石見県（島根県西部）の郷士 |
| 鹿島又之允 | 名古屋藩士 |
| 柳田　直蔵 | 郡山藩（奈良県大和郡山）出身 |
| 土屋　延雄 | 備前（岡山）の名主の子 |
| 前岡　力雄 | 十津川（奈良）郷士 |
| 中井刀祢尾 | 十津川（奈良）郷士 |

状況証拠
※「藩がバラバラ」で集まる。
※朝廷内に「助命」活動する者。
※弾正台が「神道」から証拠集めをする。
※信教の自由、賤民を四民へ議決--「その翌日」

裏で暗殺の策謀を練り、指示した「本当の犯人」は朝廷内部の長州人と長州派公家たち。

桂小五郎が「舌剣」と言うほど小楠の論は鋭い。明治政府内では、最年長であり論客の小楠に勝てるものはいない。ずるずる修正案が出されていったら一番困るの尊皇一番の長州。そもそも**神道国教化**（神国）と**五カ条の御誓文の目指す民主主義**とは水と油で、調和することは本質的にない。

**1870** 年頃 ｼﾞｬｰﾃﾞｨﾝ・ﾏｾｿﾝ商会支社「グラバー商会」設立



グラバー



坂本竜馬

「私がパークス（イギリス大使）と薩摩、長州にあった壁を壊してやった。これが、私の一番の手柄だ。」（グラバー）
グラバーが調達した武器は、亀山社中に卸し、亀山社中から薩摩に渡し、長州の手に入るように仕組まれていた。
**亀山社中**は、ジャーディン・マセソン商会の代理店（グラバー商会）のダミー会社として考えた方が筋が通る。
そもそも**同盟ではなくて「協調」**である。協調だから、幕府の第二次長州征伐時、薩摩が不出兵なのは信義である。薩摩も長州と共に幕府と戦えば、「同盟」の信義となる。**薩摩は戦っていない**ので、同盟とは言えない。藩と藩の問題なら、藩主の意を受けた家老（小松帯刀）が中心にいるのが通常。

**1870** 洋学所➡洋学校へ

万里の外より教師を招いて、**10歳から15歳**までの「童蒙」に、三年を一期として「万科之学」を学ばせることにした。

**1871** 以降 ｻﾞ・ﾍﾄﾞﾎﾞﾝ( W.E.ｸﾞﾘﾌｨｽ)著「ミカド」（福井雇）

「1869年、京都で暗殺者の兇刀に倒れる前、彼はシナ語訳の福音書によって「永遠の侍」を発見していた。**歴史上のイエス**がそれである。しかも幸いなことに、彼は教会の教義や伝統にとらわれないでイエスを見ることができた。」
**「1869年、京都新政府の会議において、横井は信教の自由だけでなく、エタつまり社会的賤民の地位を公民にまで引き上げることを主張し、実現を確実にした。」**
「日本の聡明な知識人たちも、イエスを正しく知るようになった時、その教義を受け入れるだろうと予言した。」と書いている。

**1890** 頃 勝海舟（氷川清話）晩年聞取記録



勝海舟

「長崎で初めて会った。」1861年７月（咸臨丸で帰国直後）
**「途方もない聡明な人**だと、心中大いに敬服した。」
「しばしば人をもってその説を聞かしたが、その答えには常に「今日はこう思うけれども、明日になったら違うかもしれない。」と申し添えてあった。そこでおれは、いよいよ彼の人物に感心したよ。」
「（小楠は）とても尋常のものさしではわからない人物で、いっこうに物にこだわりせぬ人であった。それゆえに一個の定見というものはなかったけれど、**機に臨み変に応じて物事を処置するだけの余裕**があった。・・失敗したものが来て善後策を尋ねるとその失敗を利用して、これを都合の良い方に移らせるのが常であった。」
「おれは、今までに天下で恐ろしいものを二人みた。それは**横井小楠と西郷南洲**だ。横井は西洋のことも別にたくさんは知らず、俺が教えてやったくらいだが、その思想の高調子なことは、おれなどは、とてもはしごを掛けても及ばぬと思ったことがしばしばあったよ。俺はひそかに思ったのさ。**横井の思想を、西郷の手で**行われたら、もはやそれまでだと心配していたのに、はたして西郷は出てきたわい。」

※長岡雲海公伝 海舟が佐久間象山に向かって

○「**今世間に人物が二人いる**。横井と西郷吉之助である。横井の論を、西郷が持って来れば、防ぎがつかぬ。じつに横井の論は恐ろしい論である。あなた方（佐久間象山ら）よりは一層進んで居る見識である。しかし横井は相談するだけの人だ。決して仕事はできない人である。横井の説を西郷が持って来れば、幕府が倒れる。



佐久間象山

○ 海舟の象山評
「物知りで博学、見識ではあるがほら吹きで困る。」

○ 海舟の小楠と象山の人物比較
「ぜんたい**横井という男は、ちょっと見たところではなんの変わった節もなく**、その服装なども、黒ちりめんの合わせ羽織に、平ばかまをはいて、大名のお留守居役とでもいうようなふうで、**人柄もしごく老成円熟していて**、**人と議論などするようなやぼは決してやらなかった。**
佐久間の方はまるで反対で、顔つきからしてすでに一種奇妙な、平生どんすの羽織に古代模様のはかまをはいて、いかにもおれは天下の師だというように厳然とかまえこんで、漢学者が来ると洋学をもっておどしつけ、洋学者が来ると漢学をもっておどしつけ、書生が尋ねてきても、じきにしかりとばすというふうで、どうも始末にいけなかったよ。」

# 横井小楠暗殺事件を探る

**御所**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| **議定** | 中納言 正親町三条実愛 | 右大臣 三条実美 | 明治天皇 | 右兵衛督 岩倉具視 | 前大納言 中山忠能 |
| | 前土佐藩主 山内容堂 | 大納言 中御門経之 | 前越前藩主 松平春嶽 | 大納言 徳大寺実則 | 前肥前藩主 鍋島直正 | 前阿波藩主 蜂須賀茂韶 |
| **参与** | 前長州藩士 木戸孝允 | 前越前藩士 由利公正 | 前肥後藩士 横井平四郎 | 前肥前藩士 副島種臣 | 前長州藩士 廣澤兵助 | 前土佐藩家老 福岡藤次 |
| | 前土佐藩士 後藤象二郎 | 前薩摩藩士 大久保利通 | 前薩摩藩士 西郷隆盛 | 前薩摩藩家老 小松帯刀 | | |

証拠１　斬奸状にある「**今般・・・」と、**前日に決まった内部機密であるべき内容が述べられている。

証拠２　Griffis　「The Mikado」　明治の栄光
「信教と賤民の二つの自由を提案して、**２４時間も経たないうちに**京都でローニンに暗殺・・」

証拠３　Midford　「英国外交官の見た幕末維新」　天皇の権力回復と神道とのつながりについて
「事態を破滅に導く恐れのある**何人かの退嬰的な貴族**をなだめなければならない・・」

証拠４　政府内に、襲撃犯たちを強くかばう者の存在があった。
※＝会議をリードする小楠に、反論できず押し切られていく者たちのうっ憤の蓄積。

証拠５　襲撃の多藩籍武士
土佐、薩摩、長州は勤皇（尊皇）がさかんだったが、公武合体の動きの中で土佐も薩摩も勤皇派藩士の弾圧を行った。尊皇を唱える他藩の武士たちは、長州に身を寄せるようになる。

証拠６　明治政府の追及調査が始まると、阿蘇神社の宮司が「前夜、投げ込まれた」と、天道覚明（血統否定）説の文書を提出してきた。「詳しく取り調べるから出頭するように」といわれると、「投げ込まれたので、それ以上の事は知らない」と出頭しなかった。　※松陰(長)と鼎三(熊)

証拠7　反幕府派三条実美は、８月１８日の政変（1866)で長州落ち。　※‘‘七卿の長州落ちつながり‘‘

## 日本の歴史を概観する

1　明治維新
W.E.Griffis(滞在M3～M7）福井藩校明進館ー東大（南校：教頭フルベッキ）・勝・春嶽・・）
**「神話はまことに豊富なのに、真の歴史書は量も少なく、質も貧弱である。」**
L.L.Janes(滞在M4～M9) 熊本洋学校
**「原始的状況から一、二歩出たところ。ありとあらゆる迷信がはびこり、進歩を妨げている」**

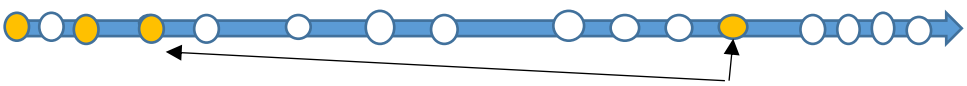
2　○検閲等で隠蔽、隠匿、捏造で失われた事実



昭和20　敗戦

**昭和10～20年「検閲」**。天皇、万世一系、神道、国学等に関連するものは、特に厳格に検閲。
神風　「元寇時の大風」を神風と呼んで、神国の証明、象徴としている。
特攻隊　江戸時代の国学者本居宣長の「**敷島**の**大和**心を人問えば、**朝日**に匂う**山桜**花」
**●３１０万人もの犠牲者と家族の思いを反映させるような、戦争の分析とその結論がない。**

**【横井小楠を歴史的に陽の当たる場所へ】**



今も続く

【事実を埋め込む作業】　検閲で吹き飛ばされた「からし」をもとの位置に戻すこと。明治２年の新政府会議で、**横井小楠が「信教の自由」と「賤民の廃止」を確実にしたという"人権"に関することが最初の手段だろう。**歴史の俎上に載っても認められる。一般の人が、小楠の人間性と業績に関心を持つ素地、基盤となりうる。小楠の業績と坂本竜馬がフィクションであること、薩長同盟や五カ条の御誓文が固有名詞でないことなども同時に広めることも効果的だろう。

関口宏さんの「**私たちがほとんど知らない近現代史**」の言葉始まる番組がある(BS161 PM0:00～)。
「検閲」によって歴史の事実が隠蔽、隠匿、捏造、置き換えされた結果、論理的に筋の通らない歴史しか書けないからであろう。**知っておくべき近現代史が貧弱なままでは民主主義によくない**。

# 本の説明

1857
1858
1859
1860 ﾌﾙﾍﾞｯｷ来日
1861
1862
1863
1864
1865
1866 ﾐｯﾄﾞﾌｫｰﾄﾞ来日
1867
1868 明治
1869 **小楠暗殺**
1870 離日 **ｸﾞﾘﾌｨｽ来日**
1871 ｼﾞｪｰﾝｽﾞ **左平太・大平**
1872 **フルベッキ**
1873 **勝海舟**
1874 離日
1875 ﾍﾞﾙﾂ来日
1876 離熊
1877
1878
1879
1880
1881
1882
1883
1884
1885
1886
1887
1888
1889
1890
1891
1892
1893
1894
1895
1896
1897
1898 死去
1899
1900
1901
1902
1903

1904
1905 離日
1906
1907
1908
1909
1910
1911
1912 大正
1913
1914
1915
1916
1917
1918
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926 昭和
1927
1928
1929
1930
1931
1932
1933
1934
**1935** 天皇機関説⇔国体明徴声明
**1936** 天皇主権・神格化＊**検閲**
**1937**
**1938** **山崎正董「横井小楠」各篇**
**1939** （※小楠研究のバイブル）
**1940**
**1941**
**1942** （日露戦争）
**1943** **ﾍﾞﾙﾂの日記③④自主検閲申請**
**1944** **その上更に当局検閲削除命令**
**1945** 終戦
1946
1947
1948
1949
1950

1951 **ﾍﾞﾙﾂの日記①②明治8～分**
1952 **坂田　大「横井小楠の思想」**
1953
1954
1955 **ﾍﾞﾙﾂの日記③④"無検閲"版**
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962 司馬遼太郎「竜馬がゆく」
1963
1964
1965
1966 影響
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974 小楠に関する執筆出版
1975 昭50 は、この頃から以降が
1976 ほとんど。
1977 **参考文献は山崎正董の**
1978 **本が主。**
1979
1980
1981 検閲された本
1982 を参考にしている。
1983 天皇の尊厳を冒す、長州
1984 （陸軍）・薩摩（海軍）を
1985 批判する文言は検閲削除さ
1986 れている可能性大
1987
1988
1989 平成
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998

# 横井小楠の言葉と解説

※　小楠はあの幕末の時期に民主主義、世界の平和主義の理論をつくりあげていた。

**1　「厳正を笑うなかれ」小楠の座右銘**

「正義」こそ日本の為と思っている。権力に迎合せず、便乗せず、自ら荊の道を踏破する。

※　真理が虚偽によって代々覆い隠されると言うのは、正義ではない。真理に目覚める先駆者はまれである。一般の人間は真理に目覚めない。真理とは、過去においても、現在においても、未来においても正しいことである。正しいことを行うことは真理である。

**2　「寵愛は身を滅ぼす」小楠が最も嫌った言葉が「寵愛」**

力量のないものが、上役に最大限媚び諂って出世する。上役も自分にとって都合が良いので引き立てる。そういう無能な者たちが入れ替わり立ち代わり政治を行うと民（公）を忘れ、私利に走り腐ってくる。政治が腐ると民の苦しみがひどくなり、我慢の限界を越えるまでそれが続くと革命がおこる。血が流れる。「寵愛」が「腐敗」、「民の苦難」の元凶である。

※　民に理解しがたい政治が行われている時には、無能な者たちがはびこり腐敗している。

**3　「術数を省いて公明なるべし」**

自己至上主義で、要領よくやると出世し要職につける。このような状態では、正道は樹立されず民の不幸は甚大である。政治に携わる役人は、上下に関わらず公明の道を歩くこと。

**4　「何でも民のため　国を治むるは民のため　君を立てて政を為す　皆民のため」**

小楠の日ごろの口癖である。この言葉に、横井小楠の実学思想、即ち「民主主義」の具体的姿がある。民の平和と安全な生活を維持涵養するのが政治だとの宣言文でもある。民が君を立てるのであって、立てた君が「民のため」の役目を果たさなければ民が「放伐」しても構わないことになる。幕末、小楠が自分に言い聞かせるように口ずさみながら民主主義へ思考をめぐらしていたことがわかる貴重な言葉である。

**5　「天下の治乱に関わらず、一国の独立を以て本と為す」**

国内の権力争いで外国の介入を招き、独立を脅かされるような愚かなまねをしてはならない。いかなる時も国が独立して成り立っていくことを最優先に考え、その時、その時に最善の方法を考えていくのが重要だ。これはすべての国についても言えることである。

**6　「世の浮雲は、何処にでもかかって心配であるが、そのうちで一番心配なのは、今日の世態である」**

内外の重要問題が山積して、政治家が何ら成すところがないから浮雲が日本中にかかっている。一も早く国策を決定して、日本の方途に誤りなきを期さなければならぬ。

**7　「当世に処するの法は、成否を眼中におかず、唯道を立てて之に向かって邁進する許りだ」**

（幕府の）優柔不断と無能は、そこに道がないからだ。成否を考えず唯道を立てて勇往邁進せよということ。道とは、過去、現代、未来に通ずる人倫の大道であり天地の公道である。

**8　「生産を盛んにし、租税を薄くして農家を苦しめないこと」**
**「水は物を濡らす性あるも、溢すれば害をなす。水を治めるは政治の眼目である」**

沼山津に転居し、農家の生活が極めて程度が低いのを目の当たりにした。封建大名は、「油と百姓は絞れば絞るほど出る」と考えていたから重税は相当なもので、権力の前に百姓がひれ伏していた。百姓と日夜語るうちに、百姓を苦しめないのには租税を軽くする必要に気づいた。

※　一生懸命生きている百姓が苦しみ、その上に胡坐をかいているものが安穏としているのは、正しい道ではない。

**9 「凡ての工業に調和あらしめて、需要と供給との間に統一を取れば、凡ゆる貨物は国内に融通して、万民その利を受ける」**

※ 小楠の経済問題に関しての論策は極めて少ない。経済の専門家ではないが、越前藩での貨幣制度改革確立、手形発行、貿易を始めて藩財政を立て直したところから、進歩的な経済感覚を持っていたと言えよう。

**10 「道は天地の道なり。我国と外国のという事はない。道のある所は外夷といえども中国**（中心に値する国の意）**なり。無道に成らば我国支那といえども即ち夷なり。終いに支那と我国とは愚かな国になれり。西洋には大いに劣れり。比べてアメリカなど態々日本のことを熟観いたし、決して無理非道なことはなさず、只日本を諭して漸々に日本を開くの了見なり。猖獗**（疫病など悪いものが猛威を振るう事）**なるもの皆天下人なり。茲で日本に正義の大道を起こさねばならぬ。強国になるではならぬ、強あれば弱あり、此道を明らかにして世界の世話やりにならねばならぬ。一発にて一万も二万も戦死するというような事は必ず止めさせねばならぬ。そこで我が日本は印度になるか、世界第一の仁義の国になるか頓と此の二筋の内、此の外には更にない。」**

中国の孟子が梁国の恵王に招かれ、「隣国との関係はどうあるべきでしょうか」と尋ねられた時、「大国は小国に使える気持ち。小国は大国に使える気持ち。」と答えています。まさに仁の心です。自分の主張ばかりのべ他国の立場を理解しないならば、ついには戦争になる。小楠の平和主義と世界一家の思想を端的に表現したものである。天地の公道は、時の権力によって一時曲げられても人間の続く限り人の魂の中に躍動する。和を求める心は人間の遺伝子に組み込まれている。

**11 「私心を以て万民に君臨するようでは、一旦は盛んなりともその夕には忽ち衰えてしまう。政治は道徳である。それは国を治め、民を安らかにするのが根本である。」**

「驕る平家久しからず」、当時の幕府、藩政府の者達には私心があり、私利私欲や又自己の地位を守り、旧習を墨守するのにこれ日も足らざる餓鬼の醜態であった。こんな者が大衆に君臨し号令してもそう永くは続かずやがては滅亡する。

※ 小楠は、政治ー道徳ー教育を三者一体視していた。

**12 「人君たる者が天から命じられた職務はなんであるかといへば、天の代わりに万民を治めることである。さすれば、天子は広大無辺にして万民を化育する自然の徳を備えた者でない限り天意に従うことは出来ぬ理である。」**

**「古堯帝がその子には位を譲らずして、舜を民間から選び出した仕打ちこそ真の大聖たる所以である。迂愚の学者は、此の道理に暗くして禅譲をとやかく沙汰するが、それは聖人の心外とする事だ。嗚呼迂儒の主張する血統論の如きは、どうして天理に順応したものであろうぞ・・・」**

**「古の聖帝は天下を巡行し、それで天下士民の下情に通じた。常に風雨を犯し山川を跋渉して天下を巡行した。然るに多くの人君は、徒らに宮中深き所に自重して独りよがりの天下大平を気取っているのはいかが。嗚呼天下の禍乱は何処から起こるのか・・・」**

賢愚にかかわらず、血統だからと民の上に立つのはおかしい。人君の条件にそぐわないものは当然放伐されてしかるべきである。天下の禍乱を起こすのは君主か民か考えればわかる。

**13 「政事の根本は人材を生育し、風俗を敦うするにあれば、学校を興すは第一の政治なり」**

政事の根本は人材の生育即ち教育にあり、風俗を敦くして（ただして）学校を興すことが政治の第一であると主張している。その教育は便乗主義でなく、官学を猟官運動と排撃しているから、独自の見識と権力に屈しない固い決意を小楠は持っていた。

※ 政治の根本は教育にあることは誰でも知っている。人材によってのみ政治は興り社会は住みよくなるが、教育が停滞すれば、人材は少なく国家の前途には深憂が絶えない。

政治家に正義感と大衆のために死闘する熱情がなく、更に教育に極めて冷淡であるなら日本にとって、また日本の未来にとって最大の不幸である。

※　官学偏重の通弊

学問を出世の道具と考えているものは官職を得るに都合のよい学校を目指す。これこそ「猟官の学」、即ち私利の学の最たるもので世の中をゆがめる根源である。学閥が官僚を占拠し、閥内の人間を寵愛する。閥外は排撃の対象となる。猟官の学は、紙上、私利の学で、民のためには実際役立たない。民の活力を奪い、世の衰退の元凶となる。

**14　「小廉曲謹をもって道徳と為し、博覧強記をもって知識と為す。いやしくも事実に当たれば漠然として糊塗す」「博覧強記の者は、一旦危急に処すると何等適切なことできず、漠然としてその場逃れの彌縫（ﾋﾞﾎｳ)策をなすに過ぎない」　※彌縫策：一時的に取り繕う策**

たとえ膨大な知識を持っていようと、日用に役立たなければ紙くず同然である。知識を得るにしても日用にどう役立たせるのか意識しながら心に留め置くことが肝要である。知識をひけらかす（競う）、即ち他人の称賛を期待する学、言い換えれば猟官の学問か、日用に生かす自分の為の学問かで同じ知識でも雲泥の差が生まれる。

**15　「人の悪心を正すのに吸々として、人心に逆らっては駄目で善心の培養啓発によって悪心の存在無きを期せよ」「教を施すには臨機応変を主とし、章句の末に拘泥せず活用を第一とする」**

「一年の計は稲を植へるにあり、百年の計は木を植へるにあり、国家千年の大計は実に人をつくるにあり」とは千古を貫く金言である。一年の計はその時その時に力を尽くすことであり、百年の計は子孫の繁栄を願う事であり、国家千年の計とは、教育の興隆によってもたらされる絶えまない科学の進歩、その恩恵に期待することである。

※　人類の無限の発展を希求しかつ待望する者は、教育を重要視し一身を粉にして教育の聖業に挺身する。これは世界の歴史の示すとおりである。聖業に当たる者には第一に徳、第二に臨機応変の力、第三に文章力（自分の思いを正しく相手につたえるため）が必要になる。世事から離れた章句の学では、実際の教場で力を発揮できない。夏目漱石が五高十周年記念式典で述べた「教育は国家百年の大計にして、師弟の和熟は育英の大本たり」も同じ意味で、**教育の成果は「師弟の和熟」に支えられたものでなければならない。**

**16　「今各国戦争の惨害に生民の不幸聞くに忍びず。故に米国と協力して以て戦争の害を除くべし。平和は天地の公道であるとの根本理念から進んで日本が万国平和四海同胞の実をあぐべきだ。」**

「平和が天地の公道」を唱える小楠にとって、戦争は私道、邪道であって極力避けるべきことであった。戦うのが前提の軍隊は、勇んで一戦交えようとする。これこそ匹夫の勇である。愚民はそれを真の勇だと誤解し、はしゃぎたてる。政治がそれを抑えるのか、利用するのかで平和か戦争かへの道が分かれる。一旦開戦にいたれば、国の予算の多くが戦争に費やされ、国が疲弊していくことを読まないといけない。このことは他国も同じである。世界が戦争をせず、世界の民が平和で、安心安全に生活できるように日本が働きかけていくべきだ。

それが、小楠の「万国平和四海同胞」の真髄である。

**17　「条約は対等で結ぶべきで外威に恐れて取り結んだ安政条約の如きはこれに背弛している。」**
**「和と云い戦いと云うも、つまり偏見である。時勢に応じてその宜しきを得るのが真の道理だ。是迄和戦の両主張があったが、既に米国と和親した以上は仕方がないから宜しく講学を以て一致し、外は応対の人物を選び、自然の理をもって外人を心服せしむべきだ。」**
**「幕府史法儒目前の利害をみて隠循筍安(ｲﾝｼﾞｭﾝｼﾞｭﾝｱﾝ)、外国の脅迫に苦しみ立つ所を知らず」**

長年の友人（熊本藩家老長岡是容）と絶交し生命の危険に曝されても、断じて世界の大勢を究め、日本の将来を憂いて立国の大策を堂々と述べている。

**18 「築城は豪族割拠時代の遺物、こんなものは四海一家の国是の障壁になる」**

四海一家の国是とは、世界の平和である。この平和を脅かすものは築城である。築城によって自分の領地を主張し、他国との衝突に備えて軍備を整える。誰も信じられない暗黒の戦国時代を生み出した元凶もこの築城である。強大な武力と置き換えてもよい。片方が強くなれば、周りも強兵を目指す。軍備の競争は戦争の第一歩である。国民生活は軍事費の重圧で奴隷的である。小楠は「民貧しくて驕兵なれば、何をもって戦わん」と云っている。北条、足利、織田、豊臣、徳川は支出の８０％以上を軍隊に投入した。そのため、民は悲惨な目にあった。

**19 「世の中に若し自分を持ち用うる者があるならば、先ずその使命を奉じて米国に赴き、米国大統領に会い平和条約を締結し、次いで各国を廻り同様の条約を締結し、世界の戦争を停止する」**

小楠は、「各国が勝手な主張のみ述べて、協調の心がなくてはついには戦争になる。苟(ｲﾔｼｸ)も人情を通ずれば戦争はなくなる。各国の政治家にこの見識がなければ百年河清を俟(ﾏ)つの愚で、戦争は絶えない。」と、言っている。

**20 「人心の不和と器械の不備をもって戦争しては、百戦百敗は必然である」**
**「戦争は対等の武器戦力を必要とする、驕兵は強兵にあらず」**

小楠の云う器械とは兵器及び科学をいう。優勢な軍隊は機械力や科学兵器を相手より多く持っている。武田信玄が戦国時代の最高の戦略家と呼ばれるのは、信玄の下で善政が行われ領民の生活安定があり信頼を受けていたことと、当時の科学兵器である小銃隊が多く敵を奇襲していたからである。関ヶ原の戦いで、西軍に機銃が１丁あったら家康の天下統一はなっていない可能性もある。乃木軍が旅順の要塞攻撃で、屍山血川の攻撃を繰り返しても相手の機関銃に簡単に一蹴されたが、これも器械の差であった。神国の民、皇軍などはただの呼称であり、精神主義をいくら強要しても器械の差はいかんともしがたいのである。神風特攻隊の敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊の名称も国学者本居宣長の「敷島の大和心を人問えば、朝日に匂う山桜花」から来ている。幕末の小楠が「国学者の見識は狂っている」との批判がズバリ的中していたことを、後世の歴史が証明したわけである。

**21 「方今五大州の中で、ロシア、イギリス、アメリカが鼎立する関係にある。他の国はいずれかに組みしている」**
**「日本人であろうと外国人であろうと差別なく皆同じ人類であるから、互いに交通し、交易の大利を通じることが今日自然の理勢と考えられる」**

明治維新の「信仰の自由」「賤民を市民へ」は、明治２年の早々行われた会議で確実になったものだが、これは横井小楠の力で実現されたものである。御誓文の「皇紀を振起」するため外国から約５，０００人の医学、政治、金融、地理、生物、地震、絵画など多種多彩の専門家が「ザ・ヤトイ」として招かれた。その第一号であるアメリカ人のグリフィスは、賤民を一般市民の地位まで引き上げた横井小楠の偉業を、「リンカーンの偉業に匹敵する」と評価したが、人間尊重の明治維新から、昭和の「鬼畜米英」へどうしたら行き着くのか不思議である。この不思議を解き明かすことで本当の戦争総括と反省がなされ、未来の平和の礎となる。

**22 「格別見識もなく、従って大策もなく大和魂とやらを振り廻す人々は、外人を以て直ちに無類の禽獣となし、最も甚だしきは初めより之を仇敵視している。天地の景日月の明を以て之を見るならば何と云うことであろう。」（和魂をとなえる）尊皇攘夷者は無識、無策の者である」「国学者流の見識は狂っている」。「この頑冥固陋が国家蒼生を過らんとすることは痛嘆の限りなき次第だ。」**

小楠は、白刃の下に立つ意気をもって即ち捨身の覚悟で叫び、且つ書いたものである。攘夷論の間違っていることを痛撃した記録は多いが、その内の一つである。この他に、「道既に形体なし、心何ぞ拘泥あらん、渾(ｽﾍﾞ)て天地に勢に順う」、「外人も又一天の子ではないか。然る

以上は之を待つに天地仁義の大道を以てせねばならぬ」等がある。海外事情を知る努力もせず、ただ攘夷、攘夷と叫ぶ者たちへの憤りが感じられる。

**23 「堯舜孔子の道を明らかにし西洋器械の術をつくす、何ぞ富国に止まらん、何ぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ。心に逆らうこと有れども人をとがむるなかれ、とがむれば徳を損ず。為さんと欲するところ有れども心を正すること勿れ、心を正すれば事を破る。君子の道は身を修るにあり。」**

臨機応変、広大無辺の小楠の政治観、世界観をこの詩文に凝縮した。この詩の中には、中国と西洋に学ぶことを表現しているが、日本についての表現がない。そのため、日本の国体を転覆する意図を持っているとデマを飛ばされた。当時、将軍、大名、又は士族でも代々世襲であって、**馬鹿でも将軍の長男は将軍になれていた。国学、神道は万葉集と古事記に執着し、大和の純粋性に拘泥するあまり外国を日本を汚す仇のように見ていた。**

小楠は、堯舜禹三代にわたる権力の禅譲（自分の血筋でなく、人格力量を共に備えた部下に皇位を渡した）を最も善とし、日本の代々の世襲制を否定した。また進んだ西洋の科学技術を学ぶことで、あくまで神国にこだわる旧習の固陋に活をいれようとした。日本の現状への不満、そしてそれを打破し、世界に打って出ようとする横井小楠の決意の雄たけびを感じさせる詩である。この檄文を持って、二人の甥（横井左平太、大平）は密航でアメリカに渡った。

**24 横井小楠の弟子福井藩主松平春嶽：「自分は辱けなくも幕府の親藩たる貴き身分でありながら夢のように、三十年の歳月を空過したのは恥かしい。併し今よりは君（小楠先生）の輔導の力を頂き、我行を磨き修養研鑽につとめ、決して徒に酔生夢死の人となるまい」**

春嶽は御三卿（一橋、田安、清水）の田安家から、福井藩に養子に入り藩主となった。時代の流れによっては将軍になる可能性も持っていた。その春嶽が、これほど低頭して小楠を福井藩に招き自分も弟子入りするという。肥後熊本藩では、変わり者、日陰者の小楠であったが春嶽は小楠の偉大な資質を見抜いていた。薩摩の芋づる、肥後の引き倒しの言葉があるが、折角の逸材を熊本藩は福井藩に持っていかれたのである。そのことは熊本藩にとっては大きな損失であったろうが、日本にとっては大きな利益であった。

**25 「学問が進むか進まないかは、人のために学ぶと己が為に学ぶとの違いに在る」**
**「良心を拡充して、日用事物の上に功を用いるのであれば、すべて学問でないものは無い。後世の学者は日用の上での学問に覚めず、ただ書物について理解するだけである。所謂古人の奴隷にすぎない」**

自分で学び、自分で考え、自分の胸にすとんと落ちるようでないと本当の学問は身につかない。書物に書かれている文字は、この世の森羅万象のごく表層を表現しているに過ぎない。書物の知識はあくまで「古人の知恵の成果」である。それから何を学んだかが重要で、どれだけ記憶したかは真の学問ではない。世の中にはもって生まれた強記の能力がありながら、知識を自慢し見せびらかすだけに止まり、実用に活かせない者が多いのは誠にもったいないことである。

**26 読書論：「まず第一にわが心也。心を持って読書すれば「格物」（本質）も見え、知識も章句ごとに広がるが、「空心」で何十年読書したとしても何の益もない。」**
**「今読書が、致知も力行も人のためにする中は、学問が好きになったり自分のものにしようとする欲も出てこない。」**

自分がどれだけ物知りか、どれだけ読書をしているか見せびらかすようでは、自分を他人がどう評価しているかに気を取られていることになる。即ち自分の中にどれほど血や肉になったのかという内面を見つめることに気が向いていない。まず、自分に力を貯えることが先である。自分の内に真理と正義の確信を持つためには、他人のためにでなく、まず自分のためである。それで、読書も日用に生きる学問となる。

**27 「命を奉ず孤臣千里の身、青山海碧一望の春、此の行唯心事を盡さんと欲す、成否は天に在りて人に在らず」**

福井藩から招聘され、如何に小楠が雀躍したことか、その姿が目に浮かぶようである。春嶽という名君の恩寵を受け、命を懸けてその恩に報いようとする純粋な気持ちとみなぎる気迫を感じさせる。橋本左内ら若手を登用し藩政改革に取り組んでいた春嶽にとって、小楠への期待の大きさもこの詩から推察される。

**28 「京師にて日本政府相立ち、上院・下院人材相集め、諸事議定の趣向にて、今より両三年にはどうなりと落着、安堵の地に至り申すべく候。」（1868.2 米国の二甥へ）**

明治新政府から出仕要請の通知が小楠の元へ届いた。新国家の体制づくりが始まる喜びをアメリカにいる二人の甥に知らせた。この時すでに小楠の頭には、三年間で新政府の体制を固める構想が出来上がっていたことを示すものである。その体制づくりを嫌う者から１年後暗殺される。小楠が目指すアメリカの民主主義が、数カ月後には１，２００年も前の律令制へ後戻りすることになる。誠に残念なことである。

**29 横井小楠の実学思想の集大成、「五カ条の御誓文」**

五カ条の御誓文の草案「議事の体の大意」は、福井藩における俊秀の弟子由利公正の作であるが、最終的な御誓文には小楠が日ごろ使っていた**「常套熟語」**が沢山使われている。

**○広く会議　○（万機）公論　○上下の情　○心を一つ　○経綸　○庶民　○人心をしてうとまざらしめん　○旧来の陋習　○天地の公道　○知識を世界に**

これらは横井小楠の専売特許のようなものである。議事の体の大意から御誓文への過程において、小楠が深くかかわっていた証明でもある。維新当初から横井小楠は参与に任命されており、御誓文にも関わることができる状態にあった。ただ熊本藩の反対で京都出仕が５カ月遅れただけである。その経緯は次のとおりである。

**維新政府参与への経緯**

**1867.11.9** 大政奉還　　**1867.12** 小楠「新政に付して春嶽に建言」を提出⇨弟子の春嶽公が新政府の議定に就任することを知っていたことになる。

**1868.1.2** 春嶽が議定に（**小楠への就任要請到着の日付1/18**。当初から就任は決まっていた。）

**1868.1.3** 王政復古の大号令　　**政府にとって一刻を争う事態なのに**

**1868.1.18 小楠に出仕せよとの通知届く**　　**熊本藩の反対で出仕が進まない**

御誓文検討修正も「手紙」------じれったさに岩倉怒る ➡ 熊本藩（韶邦）

**1868.4.6** 五カ条の御誓文はできても---「実現の具体策」見えず　　小楠の士籍復活

**1868.4.30** 小楠、藩船凌雲丸で百貫港から出る

**1868.5.14** 徴士参与を命じられる　　**1868.5.25** 参与として入京

**1868.6.2　制度局判事となる**

**1869.2.14** 朝廷の会議の席上、小楠は「信仰の自由」と「賤民の市民への地位向上」を確実にした。

**2.15** 前日の会議から24時間の経たないうちに暗殺される。事の経緯から実行犯を操った真犯人は、長州と朝廷内の固陋貴族だとほぼ断定できる。